後田堂ノ前遺跡（うしろだどうのまえいせき）

—日本ネットワークサービス韮崎営業所建設に伴う発掘調査報告書—

2009年3月

韮崎市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

うしろだどうのまえいせき

後田堂ノ前遺跡

—日本ネットワークサービス韮崎営業所建設に伴う発掘調査報告書—

2009年3月

韮崎市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

例　　言

1　本書は山梨県韮崎市藤井町北下条280-1番地所在の後田堂ノ前遺跡(日本ネットワークサービス地点)の発掘調査報告書である。

2　本調査は、日本ネットワークサービス韮崎営業所の建設に伴い、(財) 山梨文化財研究所が実施した。

3　第４章第２節はパリノ・サーヴェイ株式会社（担当　松元美由紀　分析　松元美由紀・高橋敦）による報告である。そのほか本書の原稿執筆・編集は櫛原功一が行った。

4　発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノプラニングに委託した。

5　本書に関わる出土品、記録類は韮崎市教育委員会で保管している。

6　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略)。

小澤芳雄、韮崎市教育委員会　山下孝司・閏間俊明　パリノ・サーヴェイ株式会社　千葉博俊、株式会社テクノプラニング　森谷忠・柴田直樹、三枝興業　三枝哲雄

凡　　例

1　遺跡全体図におけるＸ・Ｙ数値は、平面直角座標第８系（原点：北緯36度00分00秒)、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおり。

竪穴	１：60
炉・竈	１：30
土器・石器	１：３
大形石製品	１：４
土製品	１：２

3　本書遺構図は「遺構くん」(アイシン精機）による測量図をもとに編集した。

4　土器断面黒塗りは須恵器、塗りつぶしのないものは土師器、土器内外面の濃いドット網掛けは黒彩土器（黒色）土器、薄いドット網掛けは赤彩土器を示す。また遺構図中のドット網掛けは焼土範囲、縞状の網掛けは礫層露出面、断面図斜線は礫断面を示す。

5　遺構平面図・断面図中の遺物を示す記号の種別は次のとおり。

▲　石器　　■　須恵器　　●　縄文・弥生土器
▪　土師器　　◆　土製品　　●　土師器

6　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

7　平面図の遺物番号、遺物写真図版番号、遺物観察表番号は一致する。

8　本書図１は国土地理院発行の１/50,000韮崎、図２は韮崎市役所発行の１/2,500韮崎市管内図21を使用した。

9　参考文献は第５章文末にまとめた。

本文目次

第１章　経　過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　第３節　整理等作業の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の方法と成果 …… 4
　第１節　調査の方法 …… 4
　第２節　層　序 …… 4
　第３節　遺　構 …… 4
　第４節　遺　物 …… 6
第４章　自然科学分析 …… 7
　第１節　試　料 …… 7
　第２節　炭化種実・炭化材の同定結果 …… 7
第５章　総括 …… 9
報告書抄録
奥付

第1章　経　過

第１節　調査の経過

後田堂ノ前遺跡は、韮崎市の市街地北方、韮崎市文化ホール東側を中心とする縄文時代から古代の集落遺跡である。遺跡周辺には後田、堂の前、後田堂ノ前、坂井堂ノ前等の遺跡が点在し、これまでに県営圃場整備事業、道路拡幅工事、建物建設工事などに伴って各地点で遺跡調査が実施されてきた。

今回、本調査を実施した韮崎市藤井町北下条280-1（小澤芳雄氏所有地）は水田で、日本ネットワークサービス韮崎営業所建設工事計画にともない平成19年に韮崎市教育委員会（以下、市教委）が試掘調査を行ったところ、土師器片等が出土し、遺跡の存在が確認された。小澤氏と市教委との協議により、本調査実施に関しては財団法人山梨文化財研究所（以下、研究所）に委託実施することとなり、小澤氏、市教委、研究所の三者で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結、市教委の指導監督のもとで研究所が本調査を実施する運びとなった。市教委の判断により、調査範囲については駐車場を除く建物範囲とし、建物建築範囲では深い面まで造成の影響を受けることから、建物範囲全体を調査対象とすることとなった。調査面積は開発予定面積820㎡のうち363㎡である。なお、開発予定地南東隅については、トレンチ状に掘り下げ、遺構がないことを確認したうえで埋め戻している。

第２節　発掘作業の経過

調査は平成19年11月12日に開始した。調査区の範囲を確認したのち、重機による表土剥ぎを行ったところ、下層に谷状地形があることがわかり、調査区境にサブトレンチを設定、谷（河道）の状況および深さを確認した。遺物の出方に注意を払いながら掘削したのち、人力による精査を行い、遺構確認、溝などの掘り下げを行った。溝内からは上層、下層から遺物がやや多く出土し、集落域の東端を流下する自然流路の一部として理解できた。調査区内は塩川の氾濫の影響により、遺構面以下が砂礫層と土層の互層からなり、浸食されずに残存した微高地上に１軒の古墳時代の竪穴住居が確認できた。竈、掘り方の調査を実施し、全体の写真撮影を行い、12月25日に調査を終了した。

以下、調査日誌の抜粋である。

【調査日誌】

平成19（2007）年11月12日(月)　重機による表土剥ぎを開始。
11月13日(火)　重機稼働。谷状地形を遺物包含層まで掘り下げる。
11月14日(水)　重機稼働。竪穴１軒確認。
11月19日(月)　作業員による遺構確認作業開始。
11月26日(月)　暗渠内掘り下げ。遺構確認など。
11月27日(火)　壁面精査。土層観察。暗渠の実測など。
11月28日(水)　１・２号河道完掘。出土状況写真撮影、遺物取り上げ。
11月29日(木)　２～４号溝完掘。ピット確認。３号河道掘り下げ。須恵器坏など出土。
11月30日(金)　３号河道掘り下げ。上層の土器集中部分を写真ののち取り上げ。
12月４日(火)　３号河道掘り下げ。ベルト断面観察、写真、実測。遺物取り上げ。
12月５日(水)　３号河道断面図作成。ベルト除去、掘り下げ。
12月６日(木)　礫をはずして掘り下げ。竪穴付近の精査。３号河道上層の集石実測。
12月７日(金)　１号竪穴完掘。遺物取り上げ。３号河道内集石掘り下げ。
12月10日(月)　２号溝掘り下げ。１号竪穴竈断面実測。３号河道北壁実測。
12月11日(火)　全体を清掃ののち、完掘状況写真撮影。１号竪穴竈調査。
12月12日(水)　１号竪穴竈完掘。住居内清掃、完掘写真撮影。再度全体写真撮影。
12月13日(木)　光波測量機による実測。
12月14日(金)　１号竪穴竈写真、遺物取り上げ。２号河道断面図。全体的な測量作業。
12月17日(月)　実測作業。
12月19日(水)　１号竪穴竈補足調査。
12月21日(木)　１号竪穴床下掘り下げ、掘り方調査。
12月25日(水)　現場作業終了。

【調査参加者】

秋山高之助・伊井實・大柴欣子・小沢正臣・窪田信一・坂本行臣・鈴木節夫・萩原忠・長谷川規愛・原島進・深澤友子・藤原五月・宮川昌蔵

第３節　整理等作業の経過

整理作業は2008年４月より2009年３月まで、笛吹市石和町に所在する(財)山梨文化財研究所の整理室で行った。出土遺物に関しては遺物洗浄、注記、接合、復元、実測、トレース、版組みという工程で作業を進めた。遺構については「遺構くん」で記録した遺構図、遺物出土地点などを合成、編集し、実測遺物の番号の照合、接合関係のチェックなどを行った。１号竪穴竈内の土壌については水洗選別を実施し、同定については業者委託した。

【整理参加者・整理関係者】

竜沢みち子・小澤惠津子・田中真紀美・岩崎満佐子・

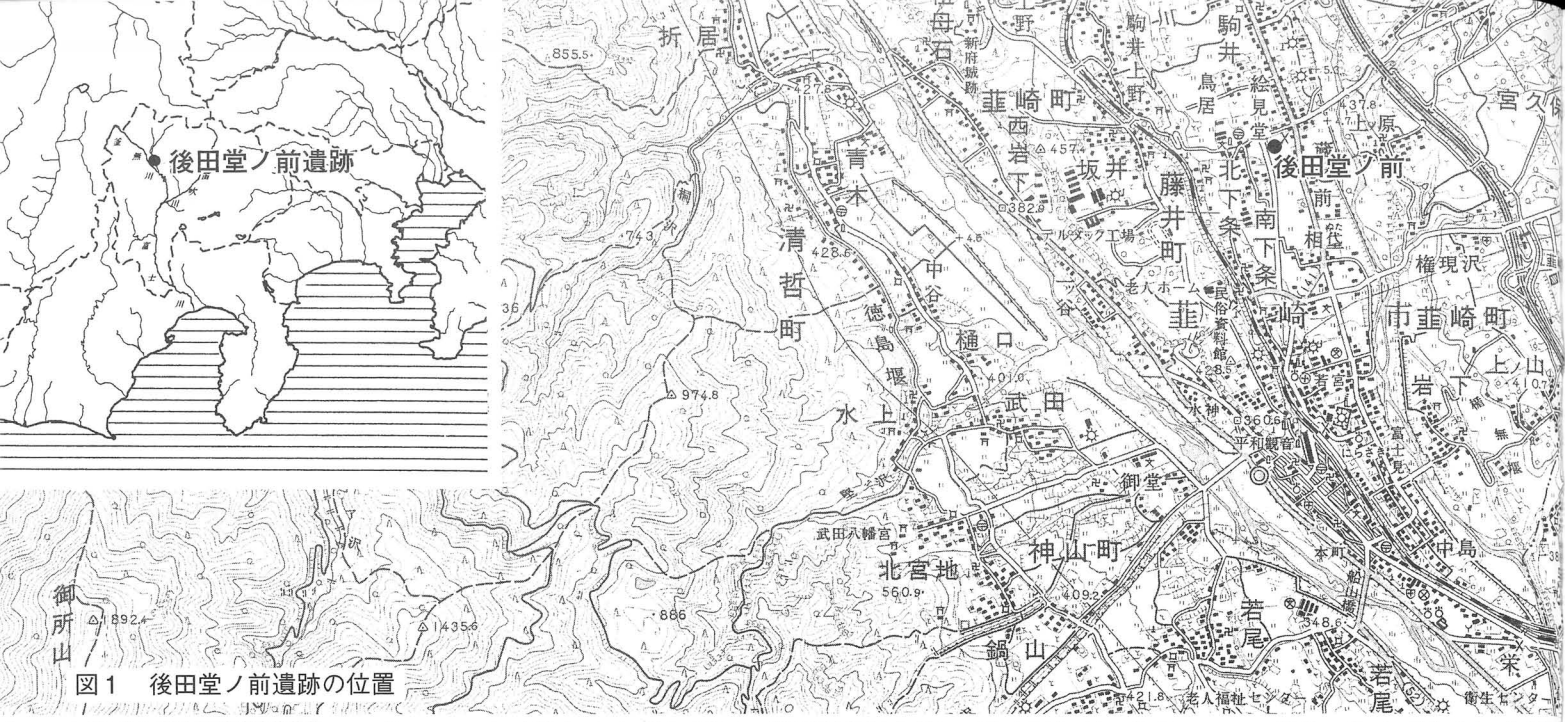


図1　後田堂ノ前遺跡の位置

図2　周辺の遺跡

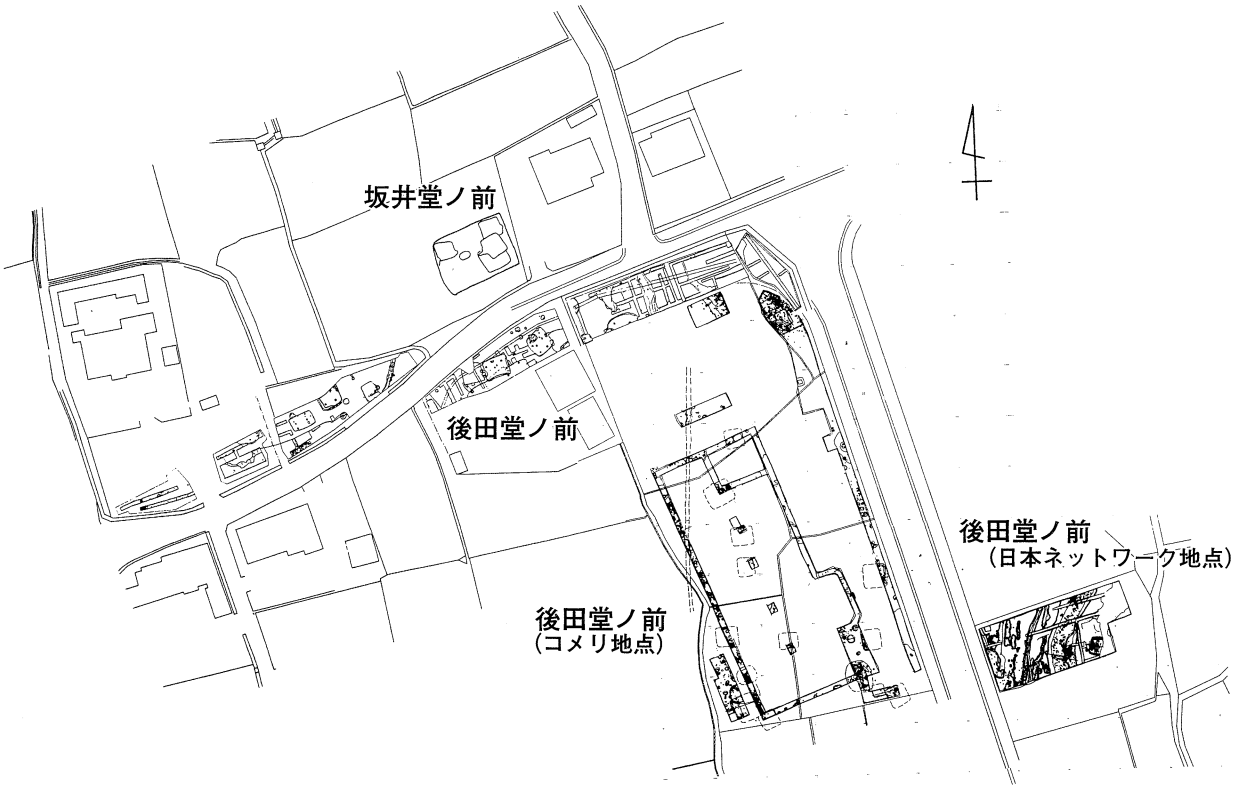


図３　周辺遺跡の調査状況

矢房静江・斉藤ひろみ・須田泰美・西海真紀・角屋さえ子・小林典子・小林祐子・手塚由美・梶原薫・広瀬悦子・原野ゆかり・藤井多恵子・柳本千恵子・林紀子・横田杏子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

後田堂ノ前遺跡は、甲府盆地北東に位置する韮崎市藤井平の塩川左岸にあり（図１）、韮崎市文化ホール南東の低位段丘面の微高地上に南北に広がる（図２）。今回の調査地点は、後田堂ノ前遺跡の中でも、東側の低位面から微高地に移行するやや低い面で、標高は377ｍである。周囲の現況は水田および住宅地帯で、東側には南へ堰が流下する。また西側には市道藤井９号線が南北に通過し、道の西側に遺跡の中心となる微高地面がある。

本遺跡が所在する藤井平は、釜無川支流の塩川が八ヶ岳南麓の岩砕流面を浸食して形成した段丘面で、塩川右岸には南北に細長く紡錘形を呈した微高地と微凹地が連続した埋没微地形からなる低位段丘面である。それらの微地形は、古代以降の条里地割の実施、度重なる水害等によって埋没し、今日みるような平坦化した状況を呈するに到った。

遺跡西側には、八ヶ岳岩砕流が流下したのち塩川の浸食を受けて形成された細長い七里岩台地の崖線が視界を遮り、東側には茅ヶ岳山麓縁辺を塩川が浸食してできた崖線が南北にのび、遺跡は東西の崖線に挟まれた間に位置する。遺跡の北方には八ヶ岳、南側には御坂山地および富士山の姿を望む。

第２節　歴史的環境

本遺跡が所在する藤井平は古くから米どころとして知られ、近世には「藤井五千石」と称された穀倉地帯であった。近年の圃場整備が実施されるまでは、水田の地割が方眼のように区画された条里型地割を良好に残す地域であり、今日でも県内有数の水田地帯となっている。

平成元・２年には北側500ｍにある韮崎市立北東小学校の校舎建設のさい、「宮ノ前遺跡」が調査された。300軒以上の古代の竪穴住居、多数の掘立柱建物跡が検出され、藤井平の中心的な大集落、かつ役所的な性格を合わせもつ集落で、墨書土器には多数の「宅」があり、また３間×４間総柱の掘立柱建物などの掘立柱建物跡群の存在が遺跡の性格を物語っている。また調

査区の一角には、平安時代の水田に加え、弥生前期後葉と推定される水田が見つかり、東日本でも最古級の水田遺構として著名である。このように、藤井平地域ではいち早く水田耕作が始まり、以後連綿と水田耕作が行われており、甲斐における水田稲作の展開を考えるうえで、考古学的に重要な地域となっている。そのほか今回の調査区に隣接する北側では、1996年に文化ホール前通りの拡幅工事で調査が実施され、古墳時代の竪穴などが見つかった。また、今回の調査とほぼ同時期に、道をはさんで西側で店舗建設に伴う発掘調査が行われた（コメリ地点）。建物の基礎を中心とした部分的な調査ではあったが、縄文中期前半、弥生末、古墳、平安時代までの竪穴住居19軒、土坑14基、集石1基などが確認された（図3）。

その他、周辺で発掘調査された遺跡として（図2）、東側の国道沿いの「上横屋遺跡」（しまむら地点）、北側に「堂の前遺跡」、「坂井堂ノ前遺跡」（藤井郵便局地点）、「三宮地遺跡」（韮崎市文化ホール西側）、南側では「後田第2遺跡」（JA梨北藤井支所地点）があり、多数の報告書が刊行されていて、弥生～奈良・平安時代にかけて濃密な集落遺跡が展開する。遡って縄文時代では、「後田遺跡」に小形ながら環状配石が見つかり、縄文後期の仮面土偶の優品が出土するなど、縄文時代遺跡の宝庫としても見過ごせない。調査区北側に通過する東西の道は、中・近世の長野県佐久地方と甲州を結ぶ信州往還に相当し、今日の国道が設置される以前の古くからの主要道路である。近年では圃場整備、市道新設によって水田地帯が宅地化され、新興住宅街として変貌し、水田地帯の広がる農村風景から市街区としての景観へ変化を遂げつつある。

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

調査区（図4）は東西30m、南北13mの略長方形で、発掘調査にあたっては、重機により遺構確認面、遺物包含層まで表土剥ぎを行い、人力により鋤簾による遺構確認ののち、竪穴、溝、ピットなど個々の遺構を調査した。遺構の調査では、断面の土層観察ののち図化を行ない、遺構実測・遺物取り上げにあたっては、測量のための基準杭2ヶ所に国家座標を付設し、パソコン接続の光波測量機（トータルステーション）で実施した。なおパソコンのソフト（図化システム）はアイシン精機「遺構くん」である。写真についてはデジタルカメラを主として用い、調査状況、途中経過、完掘状況など適宜写真撮影を行った。

第2節　層序

河川堆積と浸食により形成された低地面のため、土層堆積は安定的でないことから、基本層序は設定していないが、調査区北壁にて2・3号河道の断面を地表から観察、図化した。それによれば2～3面の水田層下に灰褐色土、灰黄褐色土と黒褐色土の互層があり、河道面となる。その下層に大形円礫を多数含む砂質土、砂層が堆積する。つまり基盤層として礫層が広がり、その上に黄褐色土の確認面、包含層が堆積するが、いく筋かの南北流路により、礫層面が露出するまで抉られている。

第3節　遺構および自然流路

調査区内からは、竪穴住居1、流路（「溝」）3、河道（「河道」）4、ピット13、集石1、暗渠4を検出した。以下、遺構、流路等の説明を行う。

(1) 竪穴住居（第2図、図版3）

1号竪穴住居1軒のみである。東壁を4号河道に切られ、全体は不明ではあるが、南北3.45m、東西現状で2.8mであり、約3.5m四方の隅丸方形の小形竪穴住居である。竈は西壁中央、わずかに南寄りに位置する西竈で、竈方向を基準にすると主軸はW-80°-Nとなる。

覆土中には、南側中央付近に床直、あるいはやや浮上して礫がまとまって存在した。竈を中心として、その周囲には焼土ブロックが広がるが、竈に関わる焼土か、あるいは火災によるものかは不明。床面には顕著な炭化材はなかったものの、後述するように床面に敷物状の薄い炭化面があり、また床面中央の14号ピットを中心に床面が被熱し、本竪穴が火災住居の可能性が高い。

竈は、長さ30～35cmの2本の袖石を幅50cmの間隔で直立させ、その間に天井石を1枚渡したものである。天井石は長さ55cm、幅25cmで、袖石間に落ち込み、中央で割れていた。

遺物は竈を中心に坏、甕類が分布し、竈左脇に5の高坏が逆位で、3の坏が壁にかかるように斜めに、1の坏が竈正面、焚口付近で出土した。また土製紡錘車(9)が竈右脇（北側）、西壁ぎわから出土している。

周溝は床面精査時には不明瞭であったが、掘り方面の削平時に竈付近と西壁の一部を除き、ぼんやりと存在するのがわかった。幅20～25cm、深さ15cmを測る。

竈正面には2重の床面が部分的に存在する。30×25cmの範囲で確認されたもので、3cm程度下に別の硬化面が存在した。

北壁寄り、中央付近で床面に貼りつくように薄い炭化物が存在した。50×45cmの不整円形の範囲にあり、南半が東西方向、北半が南北方向に交差するように、ススキのような細かい繊維が炭化状態でまばらに遺存した。敷物かもしれない。

竈正面、竪穴中央付近に14号ピットがある。直径34cm、深さ14cmで、覆土は黒褐色土。底面には礫層面が露出する。そのほか竈周辺にはいくつかの小ピットがある（15～17号ピット）。

(2) 溝状遺構（第1図、図版2）

2号河道内に3本、2号河道東側に1本の溝状遺構が存在する。

1号溝は2号河道内の断続的な溝状の落ち込みで、方向は2号河道に平行し、おおむね南北方向を示す。長さ13m、幅20～60cm、深さ数～10cm程度。

2号溝は2号河道内、東壁の立ち上がりと重なる溝で、調査区内では長さ16m、幅70cm～1mを確認した。深さ10～20cmである。2号河道に平行するようにわずかに弓なりに反り、南側では上層に3号溝が重複する。

3号溝は2号河道の東壁の立ち上がりと重複し、2号溝南端の上層に位置する溝状遺構で、幅60～80cm、長さ5.6m、深さ10数cm。2号溝よりも新しい。

4号溝は、2号河道東側をやや蛇行気味に南流する溝状遺構で、長さ15m、幅30cm～1.5m、深さ5～10cm。

(3) 河道（第3～6図、図版1・2）

調査区全体に南北方向の河道が4本存在する。西壁にかかるように1号河道があり、西半に幅広で立ち上がりが緩い2号河道、中央に幅が狭く深い3号河道、東側に1号竪穴を切る4号河道がある。

1号河道は、調査区外にのびるため規模、形態は不明確であるが、西壁側に2号河道と一部重複する落ち込みがあり、河道とした。深さ20cm程度で、南側には礫層面が露出する。弥生末～古墳後期の土器類を伴うことから、2号河道より古いことがわかる。

2号河道は、幅5.5～7m、長さ16.5m以上で、主軸方向はN-13°-E、深さ45cm。弱い立ち上がりをもつ浅い河道で、とくに東壁の立ち上がりは2号溝と重なることから不明瞭である。底面に1～3号溝をもつが、河道と一体のものであろう。河道底面には弥生後期と8世紀初頭の遺物が分布する。主体的に存在するのは後者で、いわゆる盤状坏とよぶ底径の大きな皿状の土師器坏が多いほか、同時期の須恵器坏、甕もある。

3号河道は幅4.5～5.5m、長さ16m以上。深さは北壁で70cm、断面図作成位置で50～80cmを測る。礫層を抉り込んで蛇行した流路である。

確認段階では、河道内にS字状に曲った砂質土の河道跡が確認されたが、それを含むひとまわり大きな河道として完掘できた。

土層断面は3ヶ所で観察・図化を行った。調査区北壁にかかる断面Cによれば、1・2層は現況の水田に伴う層、3・4層は旧水田層、5～18層は3号河道の新しい堆積（確認段階で把握された砂質土）による黒褐色砂質土と灰黄褐色砂の互層。23～27層は、古い段階の河道を緩やかなカーブで埋積した土層で、上層に集石がのる。断面Aでは、新しい堆積に対応する層が左端に寄っていて、須恵器坏は22層から出土している。

1号竪穴背後にあたる河道内左岸側には、人頭大の礫が上層に1列に並ぶ。調査時点では自然礫としてあまり注意しなかったが、護岸的に並べたものであったのかもしれない。

1号竪穴西側の河道左岸と北寄り、河道右岸の覆土上層には細片化した土師器甕がまとまって存在したほか、溝底面には礫の間から古墳時代後期の土師器坏、須恵器坏などが出土した。いくつかは完形で礫の間に遺存し、流れ込んだか、あるいは遺棄された状態を保つものとみられる。こうした遺物のあり方から、本河道は古墳時代後期の時期とみておきたい。

また北壁断面図からもわかるように、北壁調査区外にかかるように集石状の礫が河道右岸に堆積する。1.5×2m程度の不整形の広がりをもち、礫堆積の厚さは20～30cm程度。断面観察では掘り込みはなく、河道方向への若干の傾斜をもつことから、人為ではない集石と考えておく。縄文の集石炉のような被熱礫はない。礫の大きさは直径5～20cmと不揃いである。遺物はない。

4号河道は調査区東側の礫層面で、河原状に礫が東側に傾斜するように露出する。3号河道と同じカーブを示すことから、両者は同一時期の形成と考えられ、より本流に近いあり方といえる。遺物はとくにない。

(4) ピット（第1図、図版2）

調査区北西隅の1号河道と2号河道に挟まれた中洲

状の面に大小のピットが集まる。各ピットの幅×深さ(cm)、覆土は次の通り。

1ピ　18×16　灰褐色砂
2ピ　19×7　褐色砂質土
3ピ　71×17　暗褐色砂質土～灰褐色砂
4ピ　37×14　暗褐色砂
5ピ　20×13　黒褐色砂質土～灰褐色砂
6ピ　39×6　黒褐色砂質土
7ピ　20×11　黒褐色砂質土
8ピ　18×4　暗褐色砂質土
9ピ　21×6　暗褐色砂質土
10ピ　23×12　黒褐色砂質土
11ピ　19×8　黒褐色砂質土
12ピ　15×11　黒褐色砂質土
13ピ　24×7　黒褐色砂質土

(5) 暗渠（第1図、図版1・2）

調査区内には東西方向の1・2号暗渠、2号暗渠にT字状に接続する南北方向の3・4号暗渠が存在する。いずれも現況の水田に伴う水抜きのための暗渠である。掘り方はトレンチ状を呈するが、礫を壁際に2列並べた上に蓋石をかぶせ、さらにその上に小礫を詰め込んだものである。調査では礫をすべて抜き取り、トレンチ状の掘り方壁面で土層を観察するのに利用した。1号暗渠は3号河道を横断するように、長さ10.5m、幅40～70cmで直線状に確認されたが、本来は水田の東西幅の長さで30m以上存在し、重機による表土剥ぎの際に削除したとみられる。2号暗渠も2号河道の部分で途切れているが、河道の掘り下げによって消失した。3・4号暗渠は、長さ8～9m、幅40～60cmを測る。

2号暗渠内に詰め込まれた礫の中には石臼片、凹み石、五輪塔地輪片の石製品が含まれていた。

第4節　遺物

(1) 竪穴住居

1号竪穴（第7図1～10、図版4）

土師器坏4、高坏1、長胴甕2、甕底部1、石皿1（竈袖石に転用）、土製紡錘車1を図示した。

1～4は底が丸く平たい坏で、1は直立ぎみに口縁が立ち上る。2は内湾ぎみに外反し、口縁直下の屈曲が強い。3はくびれがほとんどない丸椀状の坏で、厚く、内外面に黒色処理をする。4は非常に薄く、口縁は直線的に外反する。外面に赤彩を行う。5はラッパ状の脚をもつ高坏で、坏部は短く内湾するように立ち上がる。内面黒彩あるいは内黒処理、外面底部から脚部にかけては黒彩とする。6・7は土師器長胴甕で、6は口縁が長く伸び、胴部がやや丸く膨らむ。9は直径4.4cm、厚さ2.4cmで、中央に直径4mmの孔が貫通する。外面はヘラナデで調整を行うのみで、無文とする。

(2) 溝

1号溝（第7図1、図版4）

1は櫛描波状文をもつ弥生後期の甕頸部。

2号溝（第7図1～3、図版4）

1･3は弥生後期の甕で、1は2重口縁の壺口縁部で、櫛描波状文をもつ。3は口唇部に縄文を施文した甕。2は小形甕か。

3号溝（第8図1～4、図版4）

1は土師器球胴甕で、2はその底部か。3は長胴甕。4は弥生後期の甕。

4号溝（第8図1、図版4）

1は土師器坏。

(3) 河道

1号河道（第8図1～4、図版4）

1は内外面黒彩とした土師器坏で、器壁は薄く、口縁部は直線的に外反する。2は弥生末～古墳前期の壺口縁で、直立ぎみに立ちあがる口縁外面に垂下する粘土紐を4本貼付する。3は高坏あるいは台付甕底部。4も同時期の小形甕底部か。

2号河道（第8図1～13、図版4）

1～4は土師器盤状坏。5は須恵器盤状坏。6は長胴甕。7・10～12は弥生末の甕・壺。8は土師器鉢。14は土師器小形高坏。9・13は須恵器甕。

1は底部外面にヘラ切痕をもち、焼成後線刻「十」をもつ。2は外面に横ヘラ磨き、内面体部に横ヘラ磨き、見込み部に放射状ヘラ磨きをもつ。3は内面に赤彩、4は内外面に赤彩をもつ。6は胴部外面に縦ハケをもち、底部に木葉痕をもつ長胴甕。7は2重口縁で口唇部に縄文を施文し、頸部内外をハケメ調整する。また10は丸く膨らむ口唇部に刺突をもつ小円板を貼付する。11は甕頸部に櫛描簾状文をもつ。12は内面を横位の条線、外面を縦ハケメとする。9は小形甕、13は丸底の甕底部か。

3号河道（第9～12図1～41、図版5）

古墳時代後期の遺物を主とする。1～13は土師器坏で、底部は平たい丸底が多く、体部中央にわずかな括れがあり、口縁部が内湾しながら開くタイプ(1～4･6・8・10)、直線的に開くタイプ（5・7・9・11)、外反して開くタイプ（12)、須恵器坏の模倣とみられる、くの字状に強く内屈するタイプ（13）がある。整形技法としては、体部下半の手持ちヘラ削り、体部上半お

よび内面のヘラ磨きがある。また7・9を除き、内外面あるいは内面のみの赤彩または黒彩がみられる。

土師器甕には長胴甕、球胴甕の別があり、整形技法としてはヘラとハケメがある。ヘラ整形の長胴甕は9個体を図示した。外面縦ヘラ削り（ナデ）、内面横ナデの長胴甕を主とし、口縁部は緩やかに丸く外反する。15は下膨れ状の長胴が特徴的で、16は胴部中央に胴径の最大径をもち、19・20も同様の形態を示す。17は口縁直下の括れ部に稜をもつ。21・22は底部のみで、上半形態が不明であるが、長胴甕の類とみておく。21は底面が平坦ではなく、やや丸く、22には底面に木葉痕をもつ。

23・27・28はハケメ調整を行う長胴甕。23は外面縦ハケ、内面横ハケ調整を行う寸胴の甕。27は胴部中央が膨らむ甕。28はやや下膨れぎみの甕で、ヘラナデの甕と同じ器形を呈す。外面の縦ハケは全体に弱い。

24・29は土師器球胴甕。24は土師器球胴甕。胴の最大径は中央やや上で、胴部上半は斜め、下半は縦、内面は横のハケメ調整を行う。口縁は丸く外反する。29は括れの径がやや大きい甕で、胴部外面上半は縦ハケ、下半は縦ヘラ削りを行う。また内面は横位のヘラナデを多用する。

34は器形が不明であるが、小形甕であろう。35は甑で、底がない。31～33も小形甕とするが、31は外面のヘラ磨きが丁寧で、壺か。

36は古墳前期の台付甕底部。30・37は弥生前期とみられる甕底部で、30は外面を縦ハケメとし、底部外面にもハケメ調整を行う。27は外面を斜めのハケメ（条痕文）とし、底部に網代痕が付着する。

38は有孔土器片で、両面穿孔による孔が中央からずれた位置に開く。不整楕円形で、外周は磨きがされていない。39は土製勾玉。先端は欠損し、全長は不明であるが、断面は円形で全体ではC字形を呈する。頭部に孔が貫通する。祭祀遺物であることから、河道に対する祓い等の祭祀行為が行われたか、祭祀行為ののち祭祀具が廃棄されたことを示すものであろうか。土師器類もそれに伴って用いられた可能性がある。40は断面扁平な棒状の自然礫で、両端部に叩き痕がわずかに認められることから、叩き石として利用されたことがわかる。41は凹石。縄文のそれではなく、古墳時代のものとみられる。凹みは片面のみで、凹み径は6cm、深さ1cmと浅く大きい。

(4) 暗渠（第12図、図版5）

暗渠内に詰め込まれた礫中に石器、石製品がいくつか含まれていた。いずれも2号暗渠出土である。1は凹み石で、縄文の石器か。2は穀臼の上臼片。3は五輪塔の地輪片か。

第4章　自然科学分析

第1節　試料

古墳時代後期の1号竪穴竈および周辺床面上の炭化物および炭化物を含んだ土壌について、炭化材、炭化種実の同定を主とした分析を行った。

採集した土壌は3袋に分かれているが、すべて1号竪穴竈覆土に関わる土壌である。食物残滓、食材残滓の検出、燃料材の樹種同定を目的に土壌を水洗選別した。作業方法としては、採取した土壌を乾燥し、重量計測ののち、ウォーター・セパレーション（浮遊選別法）により浮上した炭化物を回収した。炭化種実等の抽出、選別は行わず、抽出した炭化物を一括して同定側へ委ねた。

なお、土壌の乾燥重量は「1竪竈」－400g、「1竪竈」－3.7kg、「1号竪穴炭」－2.6kgである（注記は袋に記載されたまま）。

第2節　炭化種実・炭化材の同定結果

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

山梨県韮崎市藤井町北下条・坂井に所在する後田堂ノ前遺跡は、塩川右岸の塩川が形成した谷底平野に立地する。本報告では、発掘調査で検出された竪穴住居跡の竈内土壌および周辺床面の水洗選別により回収された微細植物片を対象に自然科学分析調査を実施し、植物質食糧や燃料材等について検討する。

1．試料

試料は、7世紀初とされる1号竪穴竈覆土および床面土壌より回収された微細植物片3試料（1竪竈、竈内土、床面上土壌）である。

2．分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。同定は抽出された種実全てを対象とする。なお、分析時に種実遺体の検出量が少なかったことから、本報告

第１表　微細物分析結果

遺構名	試料名	土壌量(kg)	分析量(g)	種類(個数)	重量(g)	最大径(mm)	分類群・部位(個数)
1号竪穴	1タテ　カマド	0.4	3.75	炭化材	2.75	21.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節
							タラノキ
	1タテ　カマド内土	3.7	7.06	種実(4)	<0.01	3.6	イネ　炭化胚乳(破片)
				炭化材	4.65	20.0	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
	1タテ内炭 882床面上	2.6	5.45	炭化材	2.97	15.0	モミ属

では微細植物片中の同定可能な炭化材について任意の数量を抽出し、同定を行っている。

(1) 種実

種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994)、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

(2) 炭化材

木口（横断面)・柾目（放射断面)・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等は、島地・伊東（1982)、Wheeler 他（1998)、Richter 他（2006）を、各樹種の木材組織は林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

３．結果

結果を第１表に示す。１号竪穴試料からは、種実４個と炭化材（1 竪竈 :2.75g,1 竪竈内 :4.65g,1 竪床面上 :2.97g）が検出された。

(1) 種実（図版７）

種実は、１竪竈内土より炭化した栽培種のイネの胚乳が４個検出された。以下に、検出された種実の形態的特徴を記す。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ４～５㎜、幅2.5～3㎜、厚さ 1.5㎜程度のやや偏平な長楕円体で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。破片は最大 3.6㎜程度。胚乳表面は発泡しており状態が悪いが、２～３本の隆条の縦列が確認される。

(2) 炭化材（図版６・７）

１号竪穴試料のうち、竈試料からは広葉樹３分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・タラノキ）とイネ科、１竪内炭からは針葉樹１分類群（モミ属）が確認された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

試料はいずれも年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射組織は単列、1-20 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus sect. Cerris*）　ブナ科

環孔材であるが、試料は年輪界付近で割れた小片である。道管は、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus sect. Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・タラノキ（*Aralia elata* (Miq.)Seemann）　ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔圏部は 4-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は単独または 2-3 個が複合して接線方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5 細胞幅、1-50 細胞高で鞘細胞が認められる。

・イネ科（Gramineae）

試料は、小片で脆い。横断面では、維管束が柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。放射組織は認められ

ない。

4．考察

1号竪穴試料からは、炭化した栽培種のイネの胚乳と、針葉樹のモミ属および落葉広葉樹のクヌギ節・コナラ節・タラノキ、さらにイネ科の炭化材（炭化物）が確認された。イネの胚乳は、竈試料より検出されたことから、当該期における植物質食糧としての利用が推定される。また、炭化材に確認されたクヌギ節、コナラ節、タラノキ、イネ科などは、燃料材等として利用されたことが推定される。

これらの分類群のうち、クヌギ節やコナラ節は、二次林（雑木林）の主構成種であり、現在の本地域では比較的一般的な樹木である。いずれも木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも優良な部類に入る。タラノキは、伐採地など日当たりの良い土地にいち早く生育する樹木である。木材は、広葉樹としては比較的軽軟で強度は低い。重硬な木材と軽軟な木材が混在していることや、周辺で比較的普通に見られたと考えられる樹木が利用されていることから、周辺より入手可能な木材を利用したと考えられる。また、床面上から出土した炭化材は針葉樹のモミ属であった。モミ属は、本地域では扇状地上や山地斜面などに普通に見られる樹木であり、その材質は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。試料の由来を考慮すると竈試料の炭化材と異なる性格（用途）も推定される。

【引用文献】

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海 青 社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

第5章　総　括

後田堂ノ前遺跡では、これまでに各地点での調査が進み、遺跡の状況が次第に明らかになっている。それによれば、本遺跡は縄文前期から中世までの集落遺跡で、縄文前期、中期前半、晩期末～弥生前期、弥生後期、古墳後期、平安時代末などに、断続的に集落が営まれた。継続性が弱く、繰り返し居住地として利用された土地柄であったという点に、本遺跡の特徴を見出すことができ、河川に面した不安定な地域性を示している。

本遺跡の主体部は、藤井平の低地の微高地にあたる中洲状地形に存在するが、今回調査を実施した日本ネットワークサービス地点は、その中でも旧流路に近い低地に相当し、流路で区切られた集落遺跡の縁辺にあたる。調査の結果、礫層を基盤層とし、上層をいく筋かの河道が時期を違えて浸食した状況が明らかとなった。

河道と呼称した旧流路は大きく2本あり、西側の2号河道が奈良時代初頭（8世紀初頭）、東側の3号河道が古墳時代後期（7世紀前半）で、3号河道に近いところに、河道と同時期の竪穴住居（1号竪穴）が存在する。ここでは3号河道と竪穴住居は同時期とみなしておくが、河道形成と竪穴居住期間が、同一土器型式の時間幅で時間差をもつと仮定した場合、竪穴が先行する可能性もある点を考慮したい。

さて、3号河道からの遺物出土状況によれば、河道上層レベルで、竪穴住居背後にあたる地点に土師器甕類が集中するほか（A地点）、24の甕が細片化した状態で集中する（B地点）。そのほか河道内全体から、遺物が均一的に出土している。A地点の遺物には、9・16・22・27・32・33等の土師器類があり、短距離間、アメーバ状の接合関係を示すのに対し、河道内では上流と下流での直線的、遠距離間の接合関係となっていて対照的である。前者は通常の竪穴内での接合関係でみられる接合状態であり、後者は水流の影響により移

動した結果といえよう。前者（A 地点）が竪穴からの廃棄かどうかについては、接合関係の分析では限界があるといわざるを得ないが、竪穴と近接する点から、その可能性は高い。後者、河道内の土器類が竪穴居住者の廃棄によるものかどうかに関しては、今回の調査範囲の中での判断は難しいが、やはり可能性はあるとみておきたい。

なお３号河道では、２本作成した断面図に河道内周辺遺物を断面投影した（第３図）。それによれば 377.5 m付近と、376.7~377 m付近の上下２面の遺物包含層が存在することが明らかである。ここで、上下の遺物の別を整理しておく。

上層－5・7・9・10・14・15・16・19・22・24・27・29・31・32・33

下層－1・2・3・4・6・8・11・12・13・17・18・20・21・23・25・26・28・30・34・35・36・37

上層と下層の接合例に３（４片中１片が上層）、36（２片中１片が上層）の２例があるのみで、それ以外はいずれも上、下層間のみでの接合を示した。

B 地点の 14、A 地点で集中的、アメーバ状接合関係を示す 15・19・29 は、いずれも上層出土の甕で、河道が埋積して細くなった段階での投棄遺物である。また長距離間での直線的な接合関係を示した 20・23 は、ともに下層出土であり、出土状況、接合関係が上下層で対照的である。

坏類では上下層間での型式差は小さいが、薄手で口縁部が丸く内湾する形式が下層に多く、上層にはやや厚手で口縁部が直線的な形式が多い傾向にあり、時間差を示している。甕類では頸部に稜をもって口縁部と胴部を区別する例が下層に目立ち、上層では口縁部から胴部にかけて稜を消すようにして縦ナデ（削り）する例が多いことが指摘できる。また弥生時代の条痕文土器片なども下層からの出土である。

３号河道と竪穴住居が同時存在すると仮定した場合、河道内の竪穴住居背後の覆土中～上層に一列に並んだ礫は、人工的に川岸を整備した石列ではなかったか、とも考えられる。また土製勾玉は何らかの祭祀行為に伴う河道内への奉賽品の可能性があり、その他の出土土器についても、そうした見方が必要になるかもしれない。

ところで、１号竪穴は１辺 3.5 m程度の小形住居で、最大の特徴として西竈をもつ。竈の方向としては、平安時代であれば圧倒的に東、奈良時代では北が多い傾向がある。南竈というのはまず存在せず、次いで西竈もほとんどない現状にある。周辺遺跡の報告によれば、古墳時代では北竈が多い傾向にあることがわかるが、本遺跡例がもつ西竈の意味については不明である。ただ、竈の普及段階にあたり、住居内での位置に統一性を欠く時期であったといえる。また小形住居という点、集落の中心から遠く、河川に近い立地のあり方が住居の性格を示唆するようにも思える。竈周辺から出土した遺物群は、周辺からの廃棄物ではなく、遺棄された遺物という見方ができ、遺物構成からみる限り通常の竪穴と何ら差異はない。

１号竪穴、３号河道埋没ののち、２号河道が流下するが、その時期は河底出土の土器類から８世紀初頭である。河道東側には居住痕跡がないことから、西側からの廃棄物であろう。このように７～８世紀初頭に藤井平を埋積する、河川氾濫などの大きな自然の営力が働いていたことがわかる。その直後に宮ノ前遺跡のような官衙的性格をもつ集落や条里地割の整備が行われるなど、人為的な動きが起こるのも、その前段階にあたる河川氾濫と無関係とは思われない。

竪穴住居１軒のみの小規模調査ではあったが、藤井平の開発という視点で見た場合、示唆に富む調査であった。こうした積み重ねの蓄積が、地域史を語るさいに重要となることは言うまでもない。

発掘調査にあたり、土地所有者の小澤芳雄氏には、発掘調査に対するご理解・ご協力を賜わり、心より感謝申し上げる次第である。本書刊行に際し、小澤氏をはじめ、調査・整理作業に参加した多くの方々、その他関係者の皆様方に対し、お礼を申し上げ、感謝の意を表したい。

【参考文献】

山下孝司　1987『中本田遺跡・堂の前遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1988『前田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1989『後田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1990『北後田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1991『北下条遺跡―1982（昭和 57）年度埋蔵文化財発掘調査報告書―』韮崎市教育委員会

山下孝司　1991『下横屋遺跡―山梨県韮崎市下横屋遺跡発掘調査報告書―』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会

山下孝司　1991『堂ノ前第２遺跡・北堂地遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』韮崎市教育委員会・峡北地域振興局

山下孝司　1992『堂地遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1992『上本田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所

山下孝司　1993『堂地遺跡Ⅱ　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1993『宮ノ前第3遺跡　宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1994『立石遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1995『宮ノ前第4遺跡　店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
伊藤正彦　1996『後田第2遺跡　JA北藤井支所建設工事に伴う発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
山下孝司　1996『琵琶塚遺跡　JA梨北藤井SS建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1996『坂井堂ノ前遺跡　藤井郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1997『宮ノ前第5遺跡　韮崎市立北東児童センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会
山下孝司　1997『山影遺跡　送電線仮鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
伊藤正彦　1997『後田堂ノ前遺跡　韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
山下孝司・閏間俊明　1998『三宮地遺跡　韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
秋山圭子・閏間俊明　1999『上横屋遺跡　店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　2001『下横屋第2遺跡　宅地開発にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2003『下横屋遺跡Ⅲ　藤井町北下条字下横谷526番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2003『下横屋遺跡Ⅳ　藤井町南下条字水無421番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2005『下横屋遺跡第6地点　藤井町南下条1558番地外地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
宮澤公雄　2007『上横屋遺跡第3地点　藤井町北下条字上横屋433番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所

第２表　土器類観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調（外/内）	胎土(量A多～D無，鉱物・岩石名)	残存率	焼成(硬～軟)	注記	備考
7	1竪	1	土師	坏	古墳後	11.4/3.0/3.5	ナデ・削り/ナデ/ヘラ切？・削り	橙/鈍い橙	B　長・石・雲・赤	完形	硬	1竪竈957	外面黒斑
7	1竪	2	土師	坏	古墳後	(12.2)/-/4.6	削り・磨き/横ミガキ/削り・磨き	灰褐	C　赤・白・雲・粘土	70	硬	1竪838・31	赤色粒のため器面アバタ状
7	1竪	3	土師	坏	古墳後	11.4/-/4.2	削り・磨き/ナデ・磨き/削り	明赤褐	B　デ・赤・角	95	硬	1竪839	内外赤彩　口縁わずかに破損
7	1竪	4	土師	坏	古墳後	(11.8)/-/3.3	削り・磨き/磨き/削り・磨き	鈍い黄橙～黒褐	B　赤・白・デ	60	軟	1竪837・951	外面黒彩　内面一部黒斑
7	1竪	5	土師	高坏	古墳後	11.5/7.9/7.4	削り・ナデ・磨き/ナデ・磨き/削り・ハケ・ナデ	赤～暗橙/黒褐	C　赤・雲微	90	硬	1竪836	内面黒彩（内黒）・同心円状磨き　外面脚部黒彩
7	1竪	6	土師	甕	古墳後	18.0/-/-	ナデ・縦削り/ナデ/-	橙～暗橙	B　石やや多・長・角	40	硬	1竪854・872・944・946・948・954・955・竈960・竈963・竈975	外面薄くスス
7	1竪	7	土師	甕	古墳後	(19.0)/-/-	ナデ・縦削り/ナデ/-	橙～暗橙	B　雲大・長・赤	-	硬	1竪865・867・868・878・931・937・956・竈	
7	1竪	8	土師	甕	古墳後	-/7.0/-	ハケ・ナデ/ナデ/木葉痕	明赤褐	C　長・角・石・赤	-	硬	1竪881	底部外面灰?付着
7	1溝	1	弥生	甕	弥生後	-/-/-	斜めのハケ・櫛描波状文/ナデ/-	灰褐/黒褐	C　長・石・角	-	硬	1溝74	内面黒変　外面スス
7	2溝	1	弥生	壷?	弥生後	(15.0)/-/-	ハケ・ナデ・櫛描波状文/ナデ/-	鈍い褐/鈍い黄褐	C　雲やや多・長・石	-	硬	2溝119	折り返し口縁
7	2溝	2	弥生	小形壷	弥生	-/-/-	ナデ/ナデ/-	灰/黒褐	C　雲・長	-	硬	2溝897	内面黒変
7	2溝	3	弥生	甕?	弥生後	-/-/-	口唇刻み・ナデ/ハケ/-	鈍い黄褐	B　長・雲・角	-	硬	2溝891	外面スス
8	3溝	1	土師	甕	古墳?	(18.8)/-/-	削り・ナデ/ナデ/-	明赤褐	B　長・石やや多・赤・角	-	硬	3溝142・885・2溝一括・(同一3溝156・160・	
8	3溝	2	土師	甕	古墳?	-/(8.0)/-	削り/-/削り	明赤褐	B　石大・長大・角・赤	-	硬	3溝146・150・155	内面剝離
8	3溝	3	土師	甕	古墳	-/-/-	縦ハケ・ナデ/ナデ/-	赤褐/鈍い褐	C　長・赤・角・雲	-	硬	3溝135	外面赤変　内面黒変
8	3溝	4	弥生	甕	弥生	-/-/-	ナデ・簾状文/ナデ/-	黒褐/灰褐	B　長・石・角	-	硬	3溝137	外面黒変
8	4溝	1	土師	坏	古墳後	-/-/-	削り・ナデ/ナデ/-	鈍い橙	C　長・赤・角微	-	硬	4溝168	
8	1河	1	土師	坏	古墳後	(12.0)/-/-	削り・ナデ/ナデ・磨き/-	鈍い黄褐/暗褐	C　赤・長・角	-	硬	1河41	内外黒彩
8	1河	2	弥生	壷	弥生後～古墳前	(16.6)/-/-	ハケ・ナデ・棒状貼付/ハケ・ナデ/-	橙～黒褐	B　長大・チ大・石・赤	-	硬	1河61・62	
8	1河	3	土師	台付甕	古墳前	-/-/-	ナデ/ナデ/ハケ	鈍い褐/黒褐	B　長・赤・雲	-	硬	1河45	脚部
8	1河	4	弥生?	甕	弥生後?	-/(7.0)/-	縦削り/ナデ/?	橙/灰褐	C　長・石・角	-	硬	1河57・65	底部外面灰?付着
8	2河	1	土師	盤状坏	8c前	14.4/8.5/3.0	ナデ・削り/ナデ/ヘラ切り・手持ちヘラケズリ	橙	D　長・雲・赤	80	硬	2河98・101	底部外面線刻「十」
8	2河	2	土師	盤状坏	8c前	14.5/10.0/2.8	ナデ・横磨き/削り・磨き/ナデ・磨き	明赤褐	D　雲微	70	硬	2河92・94	底部外面線刻「一」？　見込み部放射状磨き
8	2河	3	土師	盤状坏	8c前	(14.8)/8.5/3.2	ナデ/ナデ/削り	明赤褐	D　雲・石	40	硬	2河84	内面赤彩?
8	2河	4	土師	盤状坏	8c前	(15.0)/(10.2)/3.0	ナデ/ナデ/削り・ナデ	明赤褐	D　雲微・赤	-	やや硬	2河82・一括	内外赤彩?
8	2河	5	須恵	坏	8c前	(14.0)/7.5/3.5	ナデ/ナデ/削り・板状圧痕	灰～黄灰	B　赤・長	60	硬	2河88	外面火だすき
8	2河	6	土師	甕	奈良?	-/8.8/-	縦ハケ/ナデ/木葉痕	黒褐/橙	C　長・赤	-	硬	2河77・89・126	外面スス　底部内面白色付着物
8	2河	7	弥生	壷	弥生末	(19.8)/-/-	口唇縄文・縦ハケ/横ハケ/-	淡黄橙	C　長・角・デ・石	-	硬	69	
8	2河	8	土師	小形甕	奈良?	(14.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	赤褐/明褐	C　長・角・石	-	硬	2河96・121	口縁内面黒変（スス）
8	2河	9	須恵	壷	奈良?	(16.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	灰/褐灰	D　白	-	硬	2河93・102	外面肩部自然釉
8	2河	10	弥生	壷	弥生末?	-/-/-	ナデ・口唇貼付/ナデ/-	黄橙	D　長・赤	-	硬	2河124	口唇ボタン状貼付
8	2河	11	弥生	壷	弥生後	-/-/-	簾状文・ナデ/ナデ/-	暗褐/鈍い褐	D　長・石・角	-	硬	2河920	
8	2河	12	弥生	壷か甕	弥生	-/-/-	横位条痕/縦位条痕/-	明褐	B　長・石・花・チ	-	硬	2河85	
8	2河	13	土師質須恵	甕	奈良?	-/-/-	叩き/ナデ/叩き	明赤褐	B　長・赤	-	硬	2河76	赤焼き
8	2河	14	土師	小形土器?	?	-/-/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い橙	B　長・赤・雲	-	やや硬	2河128・同一967	
9	3河	1	土師	坏	古墳	(12.3)/-/4.0	ナデ・削り/ナデ/削り	暗橙/橙	D　長・雲-微	50	硬	318・502・821	内外面赤彩　外面圧痕状のヒビ
9	3河	2	土師	坏	古墳	(12.0)/-/3.9	ナデ・削り/ナデ/削り	橙	D　長	75	硬	217・337・343・355・603	内外面赤彩
9	3河	3	土師	坏	古墳	(12.6)/-/3.9	ナデ・削り/磨き・ナデ/削り	橙	C　赤・長	50	硬	341・345・352・522	内外面赤彩
9	3河	4	土師	坏	古墳	11.7/-/3.5	ナデ・削り/ナデ/削り	鈍い橙/橙	D　長・チ	95	硬	487・一括	内外面赤彩　外面一部黒斑
9	3河	5	土師	坏	古墳	(12.8)/-/-	ナデ・削り/ナデ/削り	黒褐～黒	D	30	硬	368・554	内外面黒斑（黒彩か）
9	3河	6	土師	坏	古墳	(11.6)/-/3.8	ナデ・削り/ナデ/削り	橙	D　長	50	硬	320・543～546・819	内外面赤彩
9	3河	7	土師	坏	古墳	(12.0)/-/3.3	ナデ・磨き/ナデ/削り・ナデ	黒褐/鈍い褐	C　長・赤・雲	35	硬	457	外面薄く黒変
9	3河	8	土師	坏	古墳	11.6/-/4.5	ナデ・削り/ナデ・磨き/削り	明褐/褐	D　雲	100	硬	614	内外面赤彩
9	3河	9	土師	坏	古墳	(13.2)/-/3.5	ナデ・削り・磨き/ナデ/削り	橙/灰褐	C　赤・デ	35	硬	408・463・681	内面一部黒彩
9	3河	10	土師	坏	古墳	(13.6)/-/4.0	ナデ・削り/ナデ・磨き/削り	灰褐/暗褐	C　赤	50	硬	259・264・270・733	外面一部黒斑　内面黒彩
9	3河	11	土師	坏	古墳	(12.6)/-/4.0	ナデ・削り/ナデ・磨き/削り	鈍い褐/黒褐	C　赤	60	硬	247・248・613・一括	内面黒斑
9	3河	12	土師	坏	古墳	(12.7)/-/3.6	ナデ・削り/ナデ/削り	黄褐	C　赤	25	やや硬	523	内外面赤彩
9	3河	13	土師	坏	古墳	10.1/-/3.7	ナデ・削り/ナデ/削り	鈍い黄褐/暗褐	C　赤	100	硬	611	内面黒彩
9	3河	14	須恵	坏	古墳	11.0/7.4/3.4	ナデ/ナデ/回転ヘラ削り	灰	D　白	70	硬	182・304・499・一括	
9	3河	15	土師	甕	古墳?	17.8/6.8/33.6	ナデ・削り/ナデ/ナデ	鈍い黄橙	C　長・雲・赤・デ	60	硬	257・259・263・271・273・279・283・284・286・287～289・292・369～371・373・394・404・407・409・411・413・414・465・492・641・643・645・648・649・650・671・675・693	
9	3河	16	土師	甕	古墳?	(19.8)/-/-	縦削り/ナデ/-	鈍い黄橙	C　長・赤・雲	30	やや硬	272・274・280・291・392・393・397・398・399・402・403・445・634～638・705・同一(271・278・401)	
9	3河	17	土師	甕	古墳	(14.8)/-/-	縦削り/横ナデ/-	明褐	C　長・雲・角・赤	-	硬	503・608	内面種実状圧痕
9	3河	18	土師	甕	古墳	(24.7)/-/-	ナデ/ナデ/-	橙	C　長・赤・石・チ	-	やや軟	228・244・596・600	

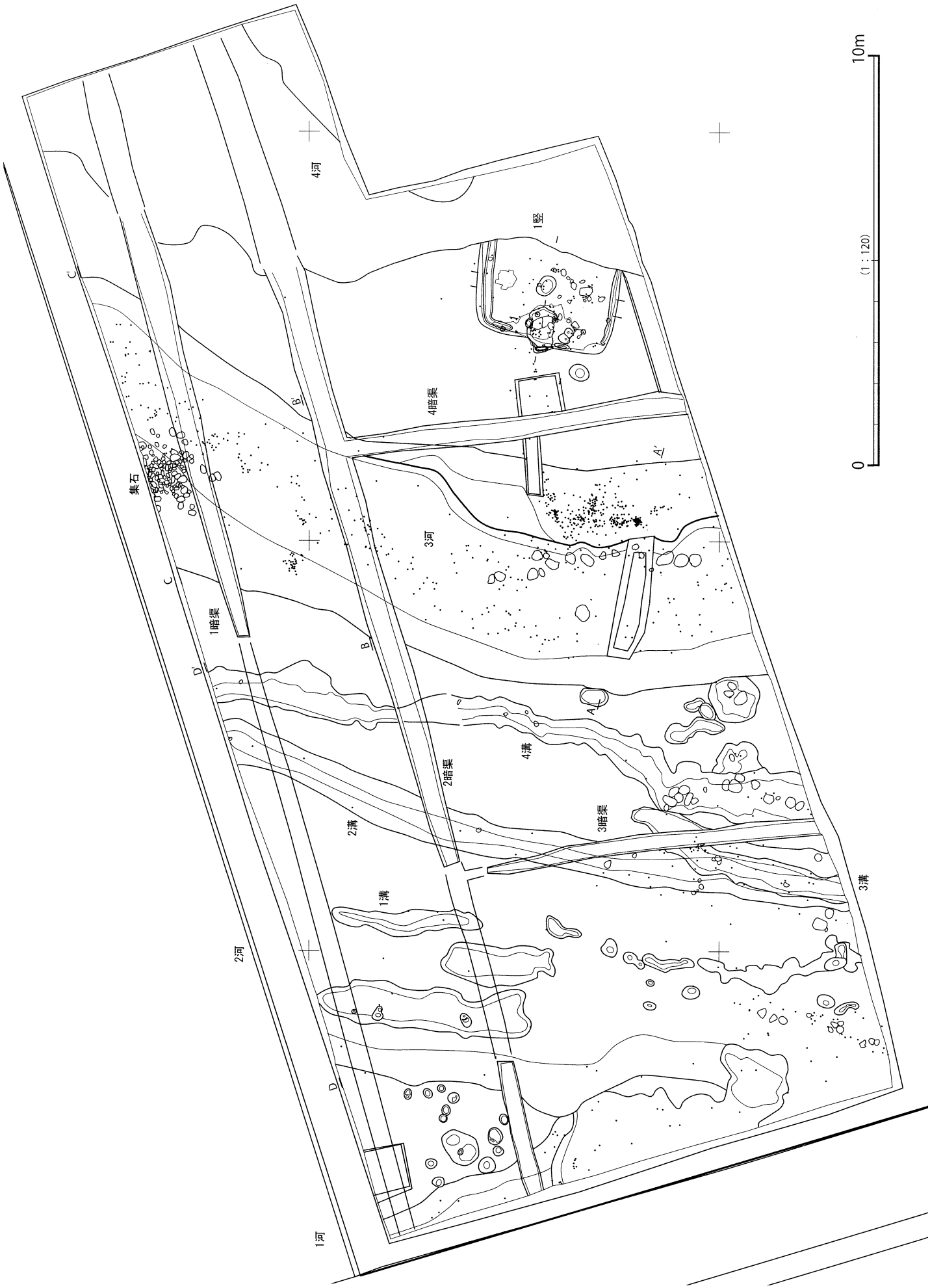
図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調（外/内）	胎土(量A多～D無，鉱物・岩石名)	残存率	焼成(硬～軟)	注記	備考
10	3河	19	土師	甕	古墳?	18.6/-/-	縦削り/ナデ/-	鈍い橙	C　長・赤・雲	70	硬	447・449・450・453～455・458～461・464・466～468・676・680・682・683～690・697・706～713・725～728・780・781	外面一部黒斑
10	3河	20	土師	甕	古墳?	(23.2)/-/-	縦ナデ/横ナデ/-	灰黄橙/鈍い橙	C　長・石・角・雲	-	硬	220・221・226・328・330・360～362・526・532・542～549・551・580・597・599・615・806・813	外面全体に薄く黒変　内面指頭痕
10	3河	21	土師	甕	古墳?	-/6.4/-	縦ナデ・横削り/ナデ/削り	橙/赤橙	C　長・赤・石	-	硬	584・591・592	
10	3河	22	土師	甕	古墳?	-/7.0/-	縦削り/ナデ/木葉痕	明赤褐	C　角・デ・赤	-	硬	695・696	
10	3河	23	土師	甕	古墳?	(21.6)/-/-	縦ハケ/横ハケ/-	鈍い橙/褐灰	C　長・赤	-	硬	223・243・249・317・332・334・348・483・511・512・514・515・519・521・533・534・537・540・564・595・601・612・784・973	外面粘土付着　薄く黒変　内面褐変
10	3河	24	土師	甕	古墳	(20.8)/(8.0)/(32.0)	縦ハケ/横ナデ/木葉痕	鈍い黄橙	C　長・赤・花・石	30	硬	185～187・189・190～199・203・204・207・209～213・同一(183・184・188・200～202・205・206・208)	
10	3河	25	土師	坩?	古墳	-/7.0/-	ナデ/ナデ/ナデ	黒褐/明褐	D　長・赤・石	-	硬	346・478・527・766・804	外面黒変
10	3河	26	土師	坩?	古墳	-/(5.0)/-	ナデ/ナデ/ナデ	赤褐/暗赤褐	C　角・デ・赤	-	やや硬	245・506	
11	3河	27	土師	甕	古墳?	(15.8)/-/-	縦ハケ/横ハケ/-	鈍い赤褐	C　石・長・赤・デ	-	硬	269・698・748・765・同一(268・326・374～376・388・423・700・702・731～734・742・749～752・800)	
11	3河	28	土師	甕	古墳	(18.0)/-/-	縦ハケ/横ハケ/-	褐/暗褐	B　長・赤・石	-	硬	237・240・482・484・505・579・785・同一(479)	口縁外面灰付着
11	3河	29	土師	甕	古墳	(27.6)/7.4/-	縦ハケ・削り/横ナデ/摩耗	鈍い橙/橙	B　長・石・赤	-	やや軟	179・420～422・425・430・433・434・470・473・494・655～658・661～663・669　同一(281・290・428・442・446・654・665)	底部外面の摩耗顕著
11	3河	30	土師	甕	縄文晩期?	-/9.6/-	縦ハケ/ナデ/木葉痕→ハケメ	灰褐/鈍い赤褐	B　長・赤・石	-	硬	181・476	
11	3河	31	土師	鉢?	古墳	(12.3)/5.2/4.8	ナデ・ハケ/ハケ・磨き/-	黄橙	D　長・石・赤	60	硬	491	口縁二次調整　片口鉢か
11	3河	32	土師	坩?	古墳?	-/(6.0)/-	削り/ナデ/ナデ	鈍い橙	C　長・石・赤	-	やや硬	294	
11	3河	33	土師	小形甕?	古墳?	-/5.2/-	削り/ナデ/ナデ	鈍い橙	C　長・石・赤	-	硬	262・403・651	
11	3河	34	土師	小形土器?	古墳?	-/8.0/-	ナデ/ナデ/木葉痕	明赤褐	B　デ-大・角・赤	-	やや硬	510・565	手づくね土器か
11	3河	35	土師	甑	古墳?	-/(5.2)/-	ナデ/ナデ/-	明赤褐	C　赤	-	やや硬	586	
11	3河	36	土師	台付甕	古墳	-/-/-	ハケ/ナデ/ナデ	橙/灰橙	C　雲・赤・長	-	硬	347・605・一括	S字甕
11	3河	37	弥生	甕	弥生	-/(9.0)/-	条痕文/ナデ/網代痕	鈍い黄橙/黄橙	B　長・赤・雲・角	-	やや硬	762	
12	15ピット	1	土師	壷		(17.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	橙	密　白・黒・砂礫・雲	-	良	970	外面一部剥離

第３表　土製品観察表

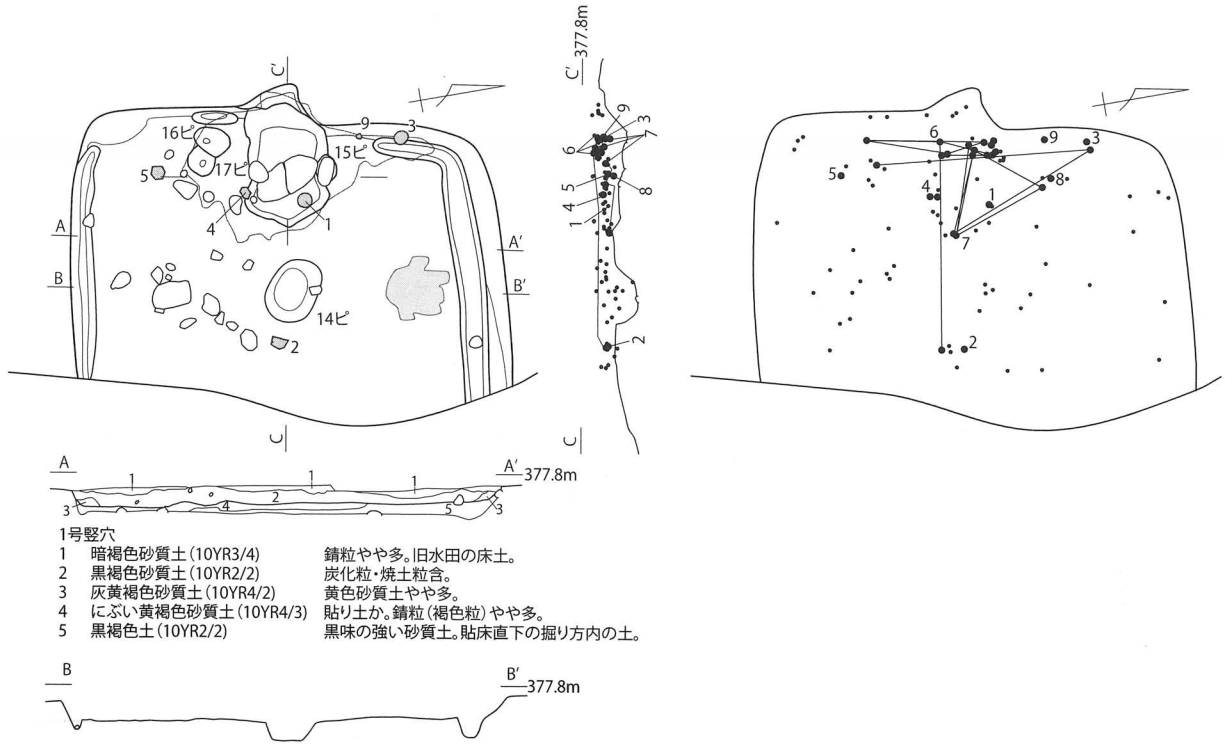
図	地点	No.	種別	長/幅/厚cm 口/底/高cm	整形技法 外/内/底	色調　外/内	胎土(A多～D無)	焼成A良～D不良	残存率	重さg	注記	備考
7	1竪	9	紡錘車	2.8/4.4/2.4	ナデ	灰褐～黒褐	C　デ・角	硬	完存	46	1竪840	直径5.5mmの貫通孔
11	3河	38	有孔円板	4.0/3.7/0.6	ナデ/ナデ/-	鈍い黄橙	B　長・石・赤・雲	やや硬	-	14	812	土器片利用　磨耗
11	3河	39	土製勾玉	3.8/-/1.1	ナデ	鈍い赤褐	C　角・赤・デ	やや硬	-	6	一括	赤彩　孔　端部欠

第４表　石器類観察表

図	地点	No.	種別	長/幅/厚cm	g	石材	色調	注記	備考
7	1竪竈	10	石皿	26.9/27.7/13.2	11400	安山岩	灰黄	1竪竈	石皿を竈に転用
12	3河	40	叩き石	19.2/6.4/2.8	588	安山岩	鈍い褐	593	サビ付着　側縁に弱い叩き
12	3河	41	凹石	16.0/15.9/8.4	2980	安山岩	灰白	566	
12	1暗渠	1	石皿	16.3/20.8/7.2	4400	安山岩	灰黄	1暗渠	
12	2暗渠	1	凹石	20.8/13.1/11.5	5020	安山岩	黒褐	2暗渠	サビ付着
13	2暗渠	2	石臼	26.7/15.5/15.0	7700	安山岩	明褐灰～黒褐	2暗渠	上臼
13	2暗渠	3	地輪	(18.7)/(11.0)/-	3120	デイサイト	鈍い黄橙	2暗渠	五輪塔部材

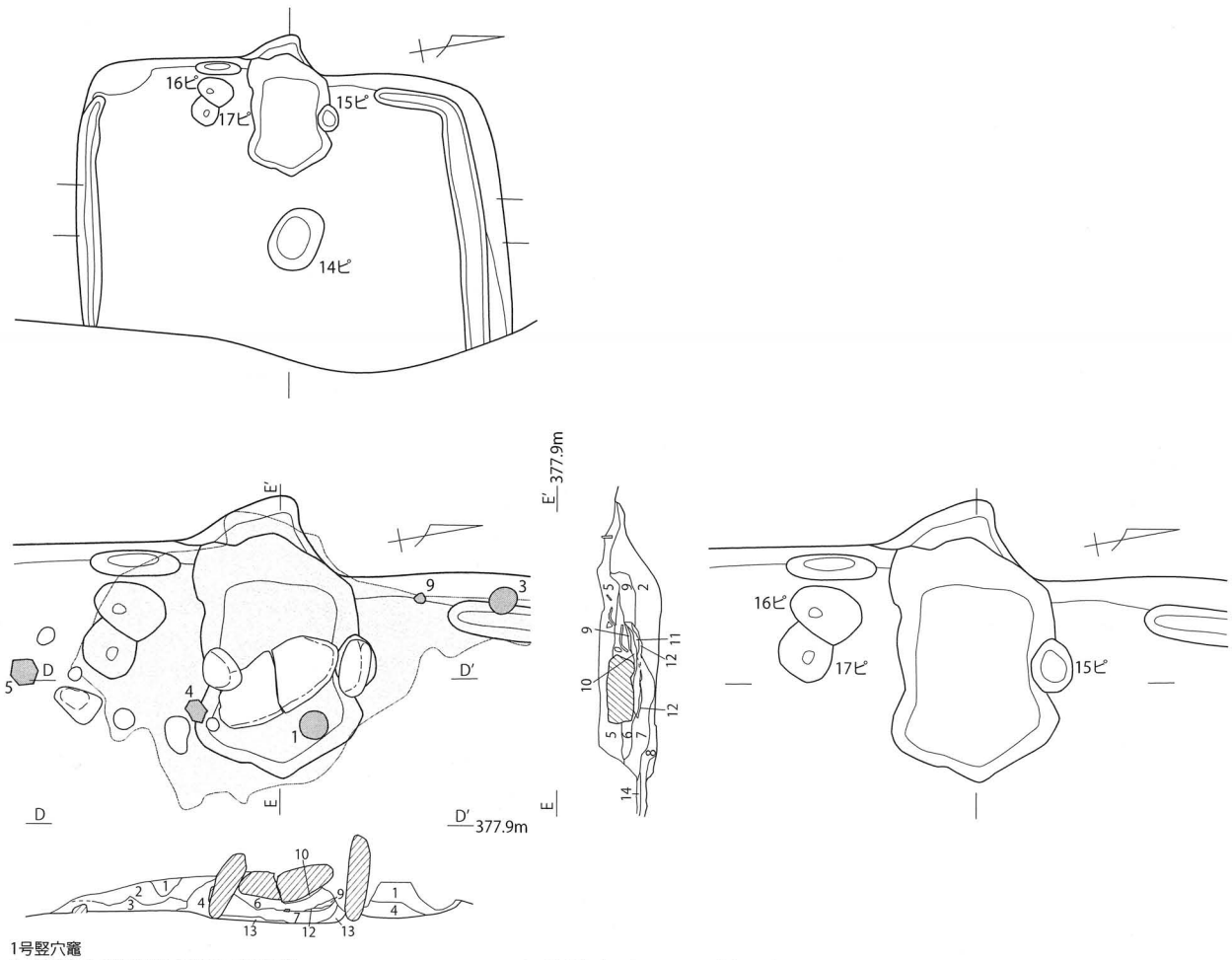


第１図　調査区全体図



1号竪穴

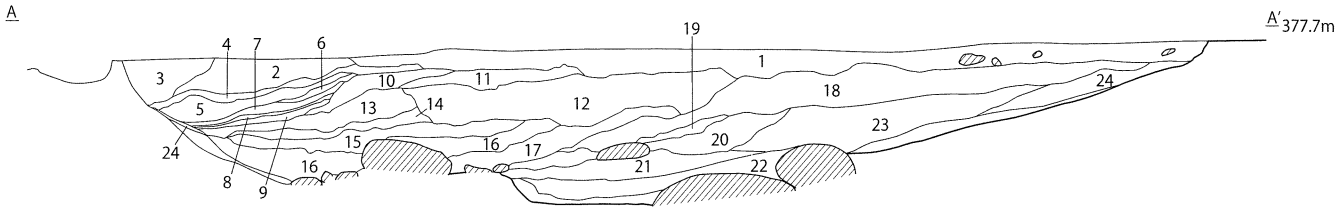
1	暗褐色砂質土(10YR3/4)	錆粒やや多。旧水田の床土。
2	黒褐色砂質土(10YR2/2)	炭化粒・焼土粒含。
3	灰黄褐色砂質土(10YR4/2)	黄色砂質土やや多。
4	にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)	貼り土か。錆粒(褐色粒)やや多。
5	黒褐色土(10YR2/2)	黒味の強い砂質土。貼床直下の掘り方内の土。



1号竪穴竈

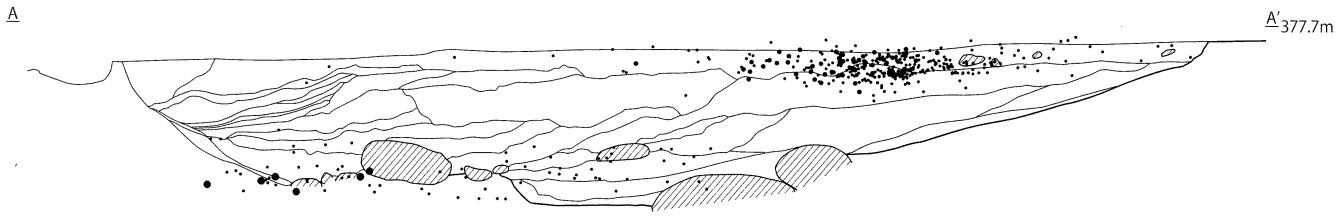
1 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物・焼土粒含。
2 暗褐色土(10YR3/4) 焼土ブロック(径1～2cm)やや多。炭化物含。
3 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物少。
4 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒含。竈粘土の崩れか。
5 暗褐色土(7.5YR3/3) 錆粒多。焼土粒・炭化粒含。
6 黒褐色土(10YR2/3) 焼土小ブロック含。炭化物やや多。
7 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物多。焼土粒やや多。黄色小ブロック含。
8 暗褐色土 (10YR3/3) 黄色小ブロックやや多。
9 焼土 (2.5YR4/6) 赤褐色土。
10 褐灰色土 (10YR5/1) 灰層。
11 明褐色焼土(7.5YR5/6) 焼土層。オレンジ色の焼土層。
12 黒色炭化物(10YR1.7/1)炭化層。
13 暗褐色土 (10YR3/3)
14 黄褐色土 (10YR5/6) ローム土。貼り床か。錆粒含。

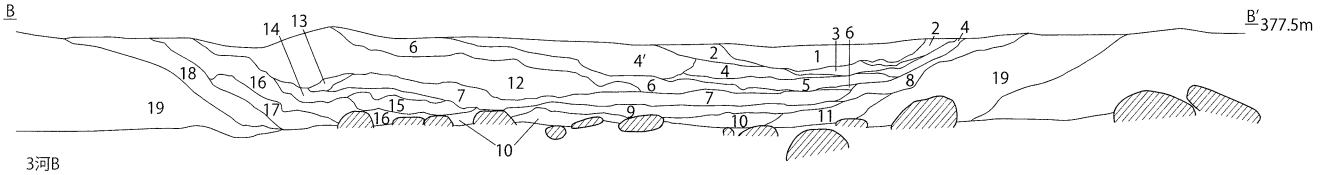
第2図 1号竪穴



3河A

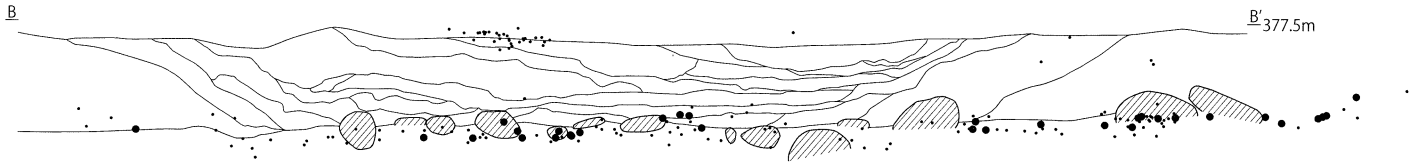
1	灰黄褐色砂質土	(10YR4/2)	鏡粒分やや多。
2	灰白色砂	(10YR7/1)	下層はやや粗。上層はやや細かい砂。
3	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	やや黒味有。シルト混。
4	黒褐色砂質土	(10YR3/1)	炭化物含。鏡化。
5	灰白色砂	(10YR7/1)	やや粗。
6	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	３層と同質。シルト的。
7	褐灰色砂	(10YR4/1)	径1～2mmの砂粒。粗。
8	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	３層と同質。
9	褐灰色砂	(10YR4/1)	7層と同質。粗。
10	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	3･6層と同質。砂質～シルト土。
11	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	3･6層と同質。やや黒味有。
12	にぶい黄褐色砂質土	(10YR4/3)	黄色シルト混。鏡粒･炭化物含。鏡粒やや多。
13	褐灰色砂	(10YR6/1)	上層は細。下層はやや粗。鏡粒化。
14	黒褐色砂質土	(10YR3/1)	黒色土と砂混の互層。
15	褐灰色砂	(10YR5/1)	上層は細。下層はやや粗。
16	黒褐色シルト	(10YR3/1)	炭化物含。鏡粒有。砂質土混。
17	にぶい黄褐色砂質土	(10YR4/3)	一部シルト含。鏡粒やや多。
18	にぶい黄褐色砂質土	(10YR4/3)	
19	黒褐色土	(10YR2/2)	黒味強。シルト質に近い。
20	黒褐色土	(10YR3/2)	砂層と黒色土の互層。鏡粒多。黒味やや弱。
21	黒褐色土	(10YR2/2)	黒味強。3河Bの17層と同質。
22	褐灰色礫	(10YR4/1)	径2～3cmの礫多。3河Bの10層と同質。
23	褐色砂質土	(10YR4/4)	



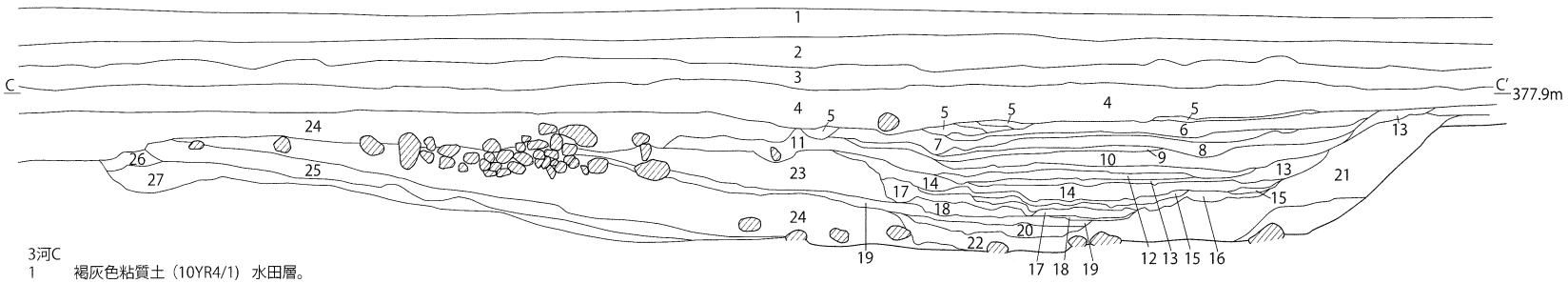


3河B

1	灰白色砂	(10YR7/1)	やや粗。
2	にぶい黄褐色砂質土	(10YR4/3)	鏡化した砂質土と暗褐色土の互層。
3	灰白色砂	(10YR7/1)	やや粗。
4	灰黄褐色砂	(10YR7/1)	細かい砂層。炭化物含。
4′	にぶい黄褐色砂	(10YR4/3)	細かい砂層。4層と同質。やや黄色い。炭化物含。
5	灰白色砂	(10YR7/1)	やや粗。
6	黒褐色砂質土		黒色土と褐色砂の互層。炭化物含。シルト状。
7	灰白色砂	(10YR7/1)	ややくすんだ層と灰白色の部分あり。やや粗。
8	にぶい黄褐色砂	(10YR4/3)	細かい砂層。11層と類似。
9	黒褐色土	(10YR3/2)	シルト状。６層類似。直下の10層面に鏡粒･炭化物含。
10	にぶい黄褐色礫	(10YR4/3)	径0.5～1cm大の小礫多。
11	にぶい黄褐色砂	(10YR4/3)	鏡粒含。
12	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)	炭化物･鏡粒含。
13	褐灰色シルト	(10YR4/1)	炭化物少。
14	褐灰色シルト	(10YR4/1)	炭化物少。
15	褐灰色シルト	(10YR4/1)	やや粗。7層類似。
16	にぶい黄褐色シルト	(10YR4/3)	12層類似。炭化物･鏡粒含。
17	黒褐色土	(10YR3/1)	黒味強。
18	黒褐色土	(10YR3/2)	黒味弱。地山類似。
19	褐灰色砂質土	(10YR4/6)	地山。確認面。鏡粒含。



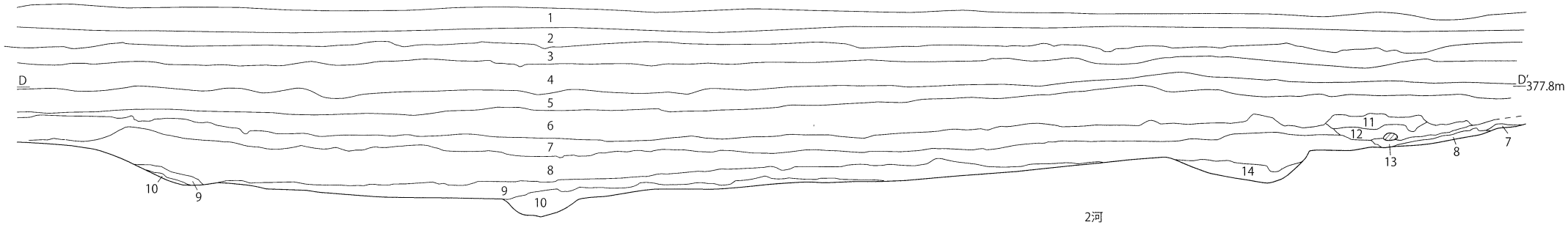
第３図　溝・河(2)



3河C

1	褐灰色粘質土	(10YR4/1)	水田層。
2	褐色土	(7.5YR4/4)	水田床土。錆粒多。
3	暗褐色土	(10YR3/3)	錆粒含。旧水田層。
4	暗褐色土	(10YR3/4)	3層よりやや暗い。錆粒やや多。
5	暗褐色土	(10YR3/3)	錆化。砂粒混。
6	褐灰色砂	(10YR5/1)	
7	灰黄褐色シルト ＋暗褐色シルト	(10YR5/2)(10YR3/3)	互層。11層と同質。
8	灰黄褐色砂	(10YR4/2)	
9	黒褐色土	(10YR3/2)	やや砂質土に近い。
10	灰黄褐色砂	(10YR4/2)	
11	灰黄褐色シルト ＋暗褐色シルト	(10YR5/2)(10YR3/3)	互層。7層と同質。
12	灰黄褐色砂		
13	灰黄褐色シルト ＋暗褐色シルト	(10YR5/2)(10YR3/3)	11層と類似。
14	灰黄褐色砂		
15	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	やや黒味強。一部シルト状。
16	灰褐色砂礫		やや粗い。小礫含。
17	褐灰色砂質土	(10YR4/1)	錆粒含。
18	灰褐色砂礫		やや粗い。小礫含。
19	黒褐色砂質土	(10YR3/2)	炭化物やや多。錆粒含。
20	灰褐色砂礫		やや粗い。小礫含。
21	黒褐色土	(10YR3/2)	27層と類似。やや黒味弱。錆粒含。
22	黒褐色砂質土	(7.5YR3/2)	旧水田床土か。錆化層。
23	褐灰色砂質土	(10YR4/1)	炭化粒・錆粒含。
24	暗褐色土	(10YR3/3)	上層に集石。
25	黒色土	(10YR2/1)	黒味強。
26	灰黄褐色砂質土	(10YR4/2)	24層と類似。錆粒少。
27	にぶい黄褐色砂質土	(10YR4/3)	24・28層と類似。錆粒含。

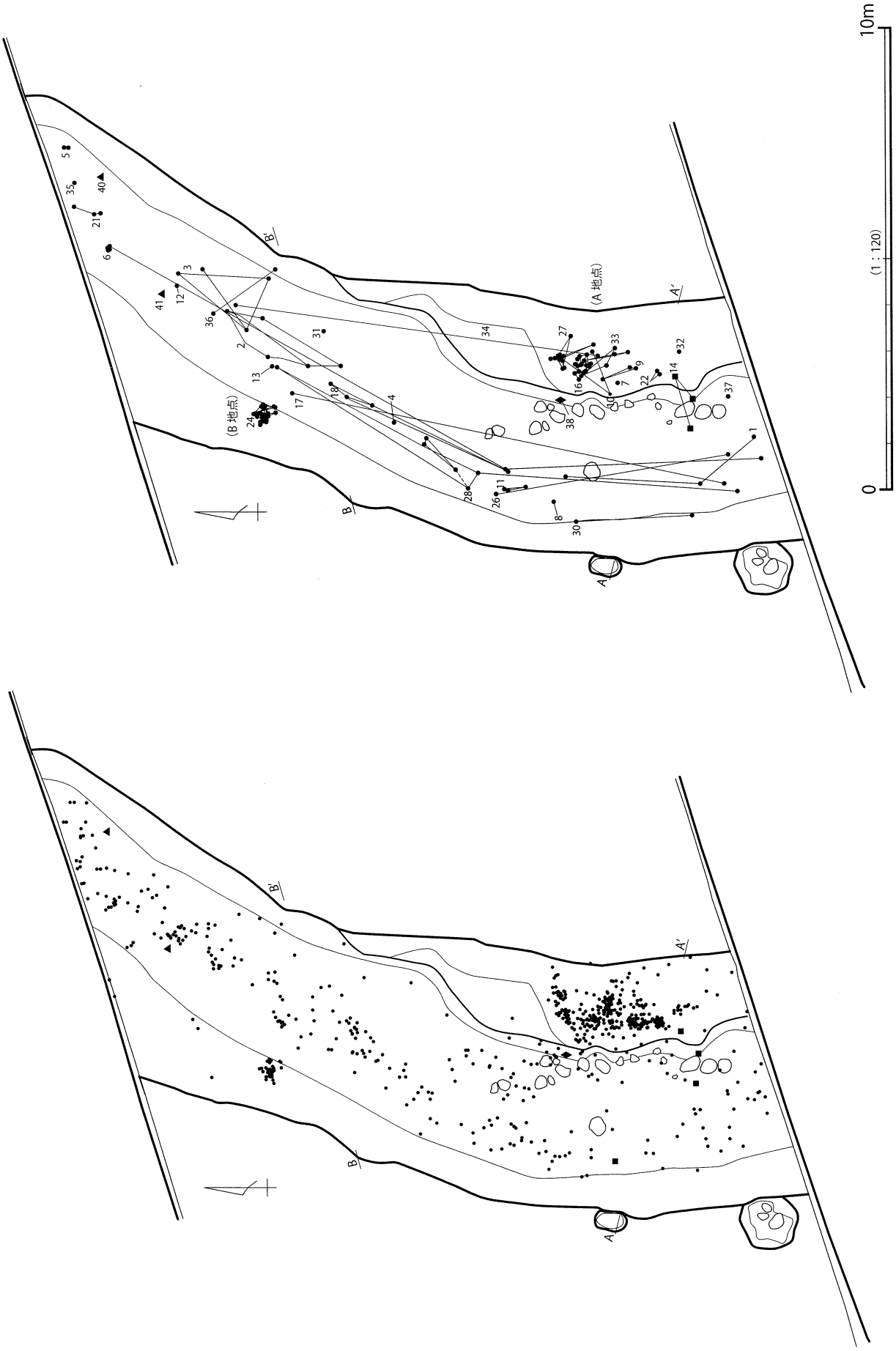
0 (1：40) 2m



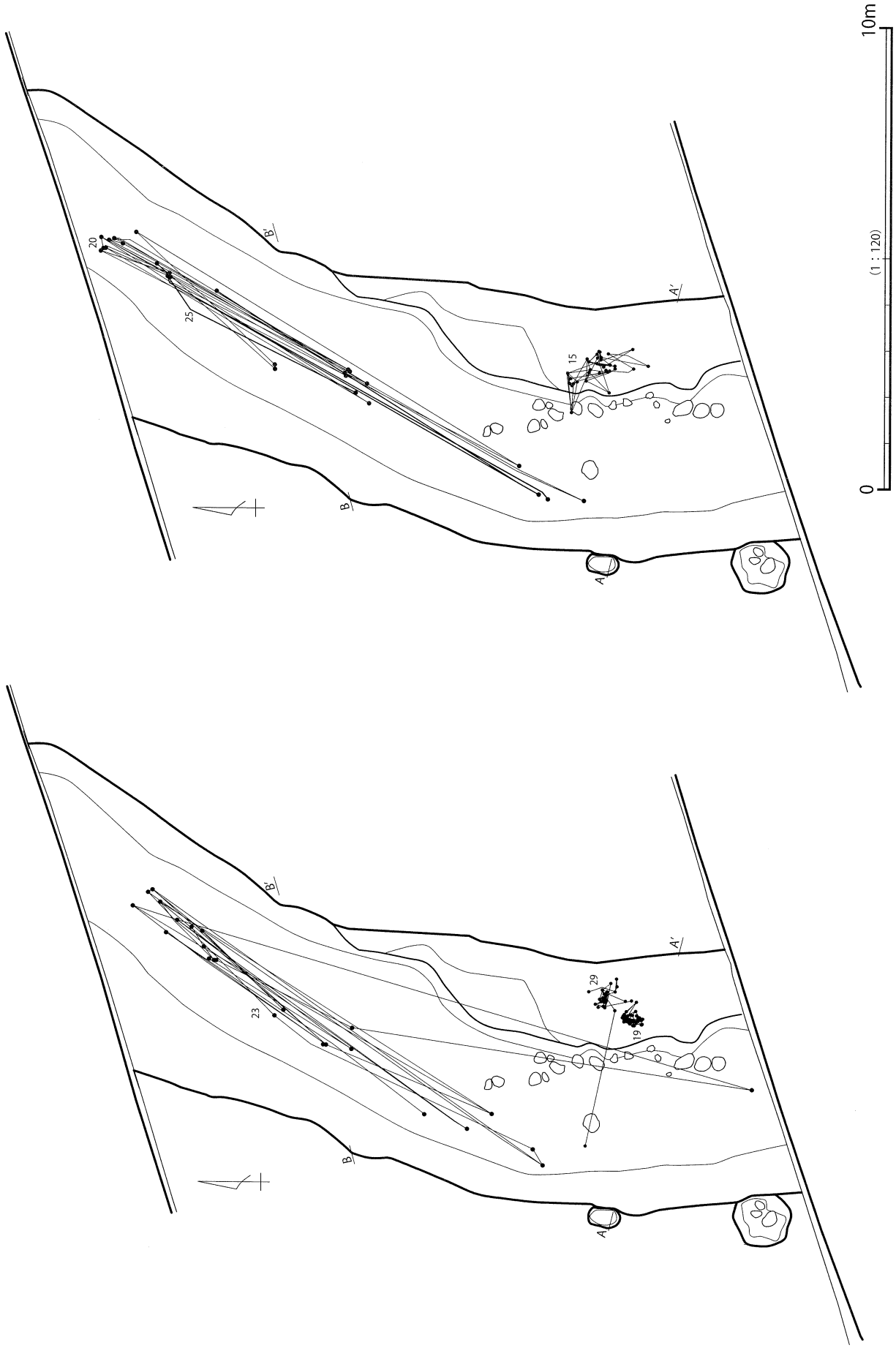
2河

1	褐灰色粘質土	(10YR4/1)	水田。
2	褐色土	(7.5YR4/4)	水田床土。錆粒多。
3	暗褐色土	(10YR3/3)	錆粒含。旧水田層か。
4	暗褐色土	(10YR3/4)	上層は床土状に錆化。
5	黒褐色砂質土	(7.5YR3/2)	旧水田床土か。錆化層。
6	褐灰色土	(10YR4/1)	5層とほぼ同質。錆粒やや少。赤色粒・炭化粒含。
7	黒褐色土	(10YR3/1)	シルト状。錆粒含。遺物なし
8	灰黄褐色砂質土	(10YR4/2)	錆粒含。
9	黒褐色砂質土	(10YR3/1)	シルト状。7層と類似。
10	にぶい黄褐色砂質土	(7.5YR4/3)	
11	褐灰色砂質土	(10YR5/1)	砂粒多。錆粒含。
12	黒褐色土	(10YR3/2)	やや砂質。砂粒やや多。
13	暗褐色砂	(7.5YR3/4)	錆化したやや粗い砂層主。土器片混。
14	黒褐色土	(10YR3/1)	9層と類似。2溝覆土。ややシルト状。

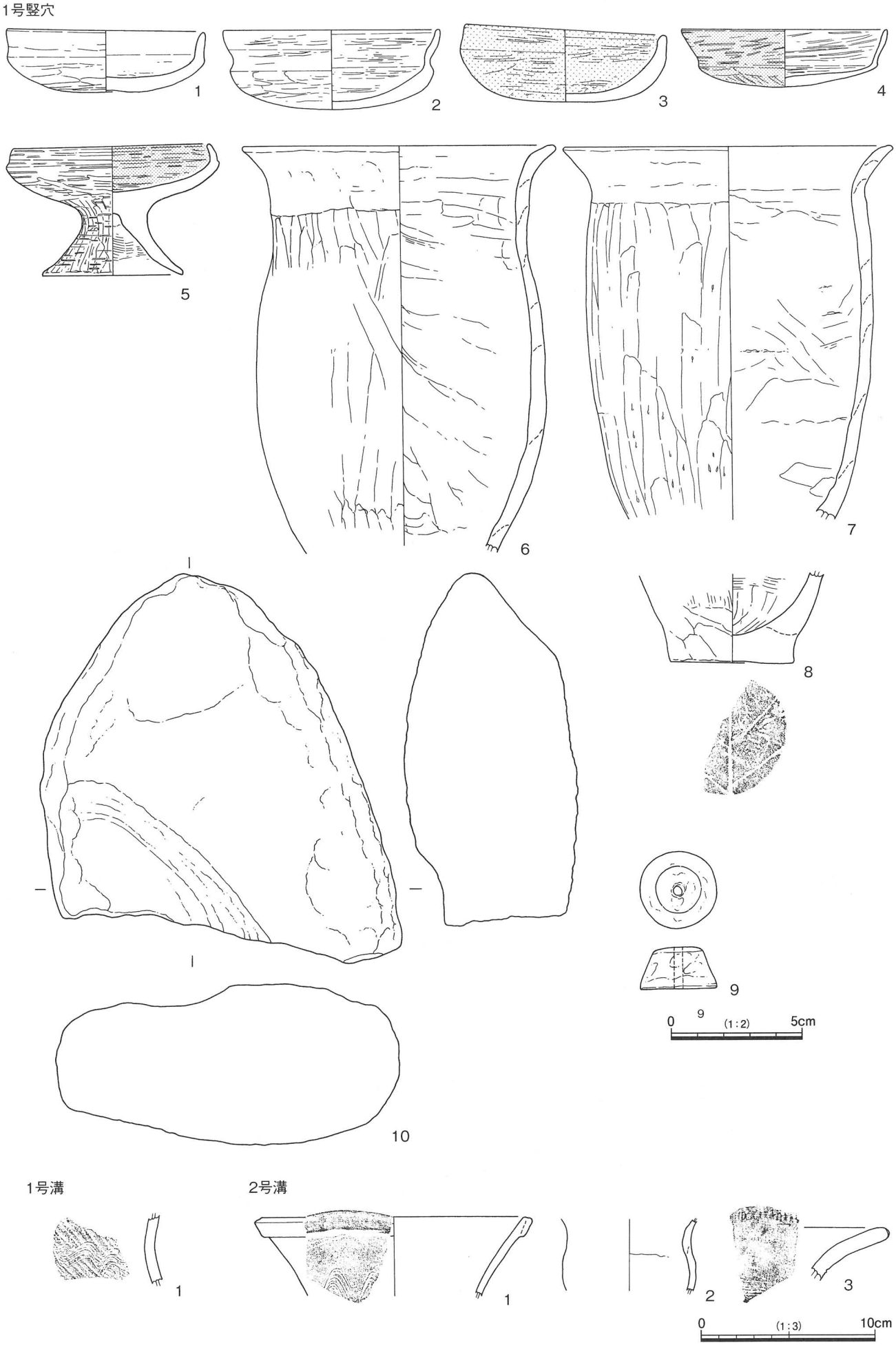
第4図



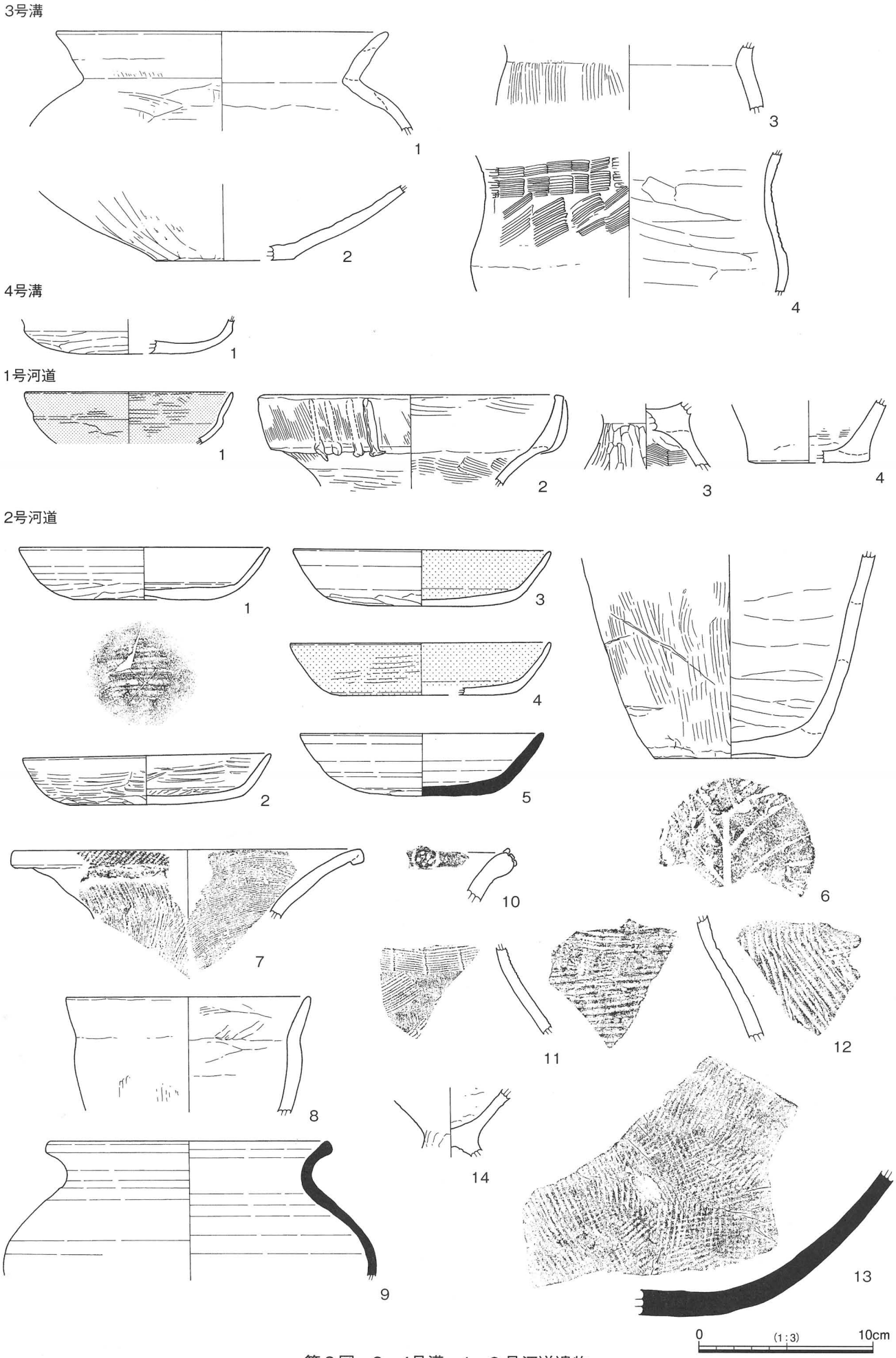
第５図　３号河道遺物分布図(1)



第６図　３号河道遺物分布図(2)

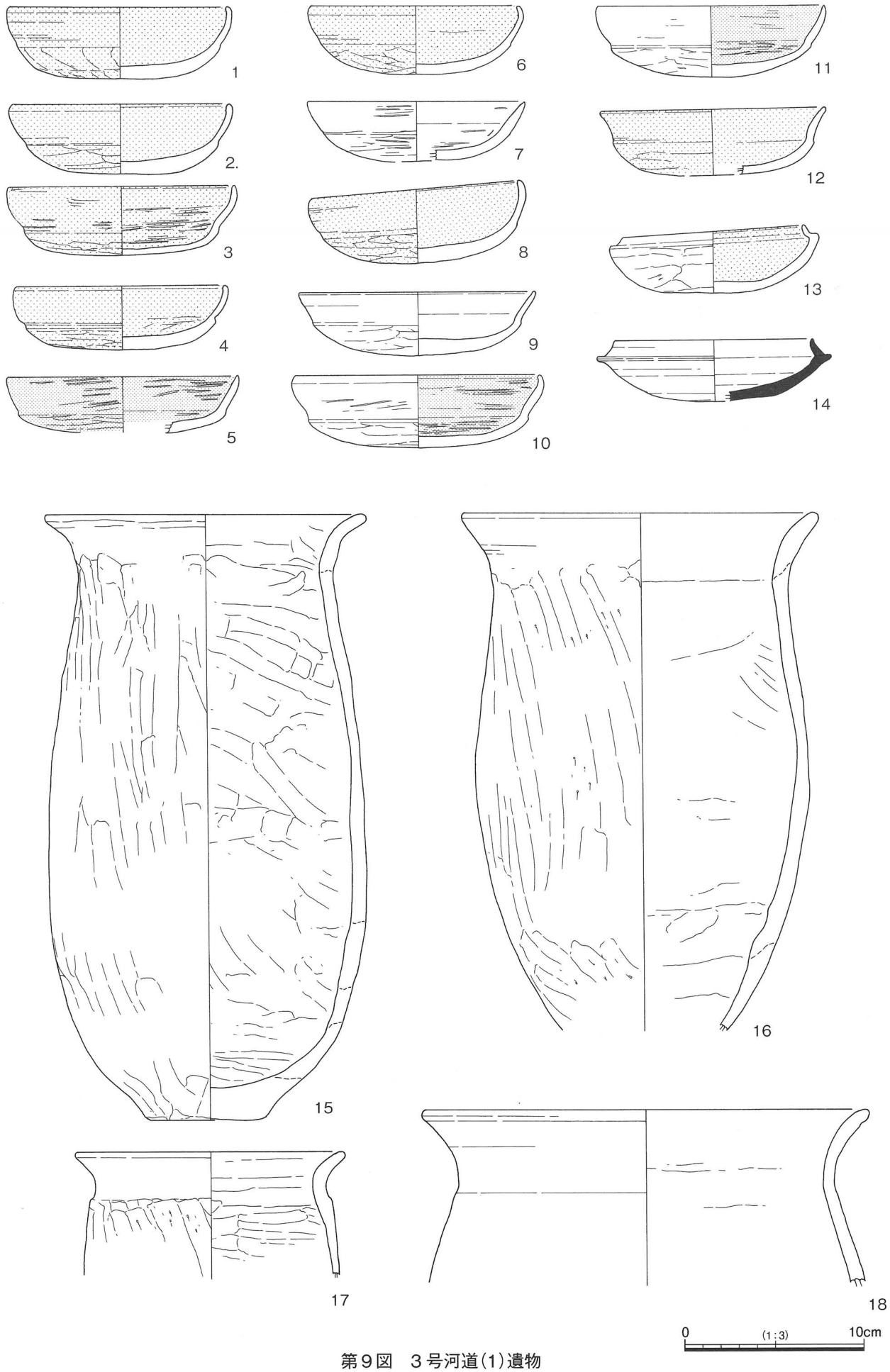


第７図　1号竪穴、1・2号溝遺物

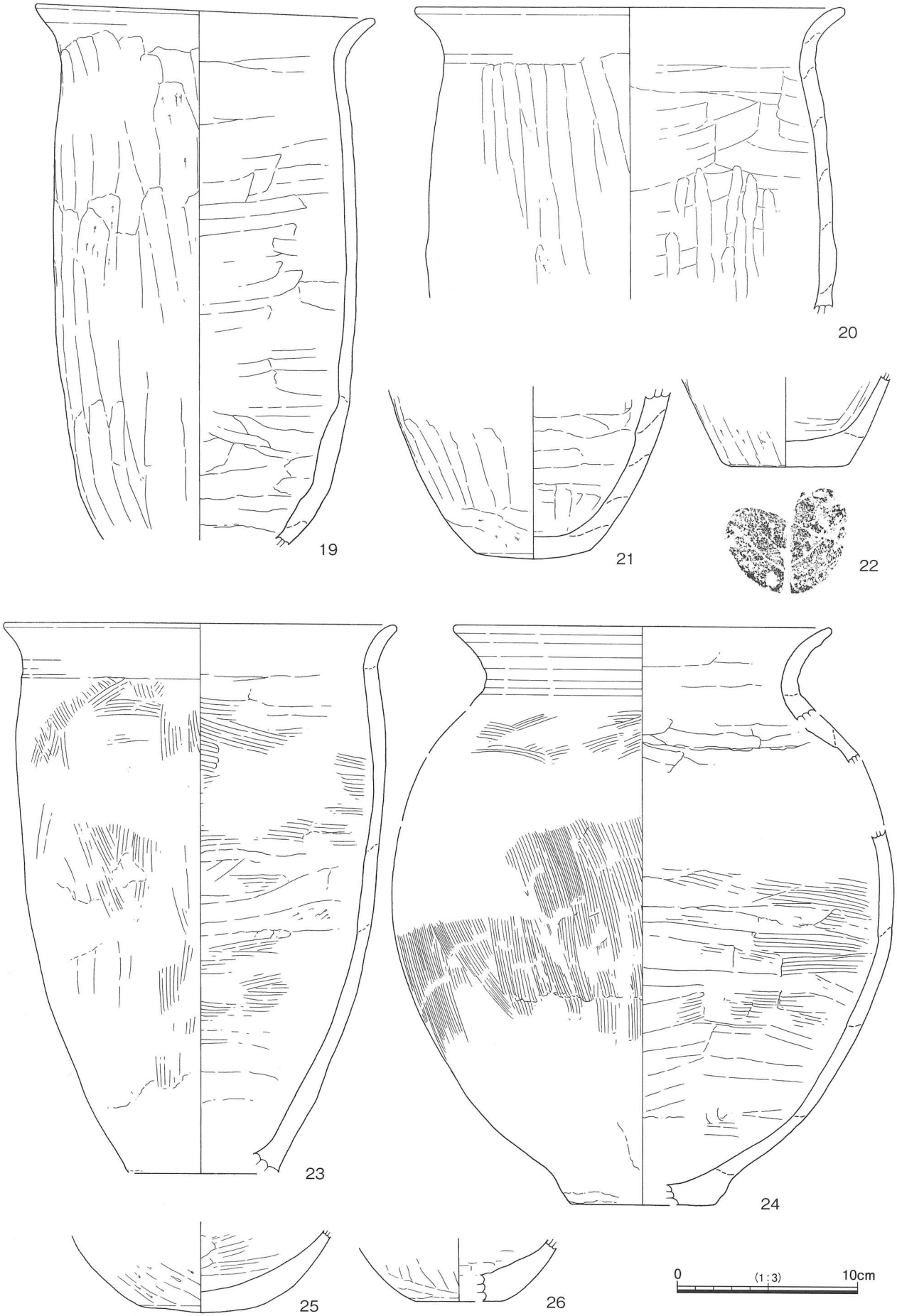


第８図　３・４号溝、１・２号河道遺物

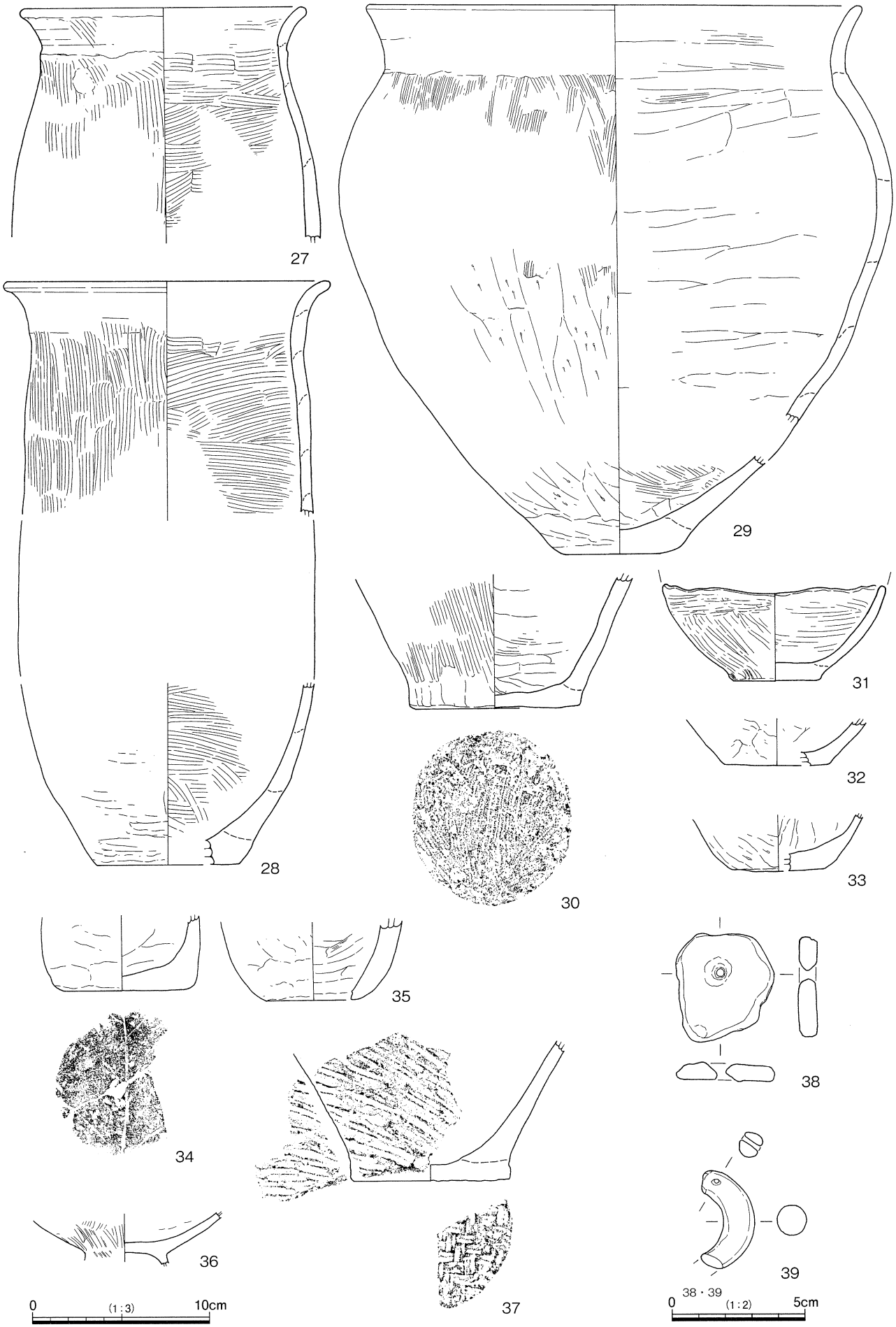
3号河道



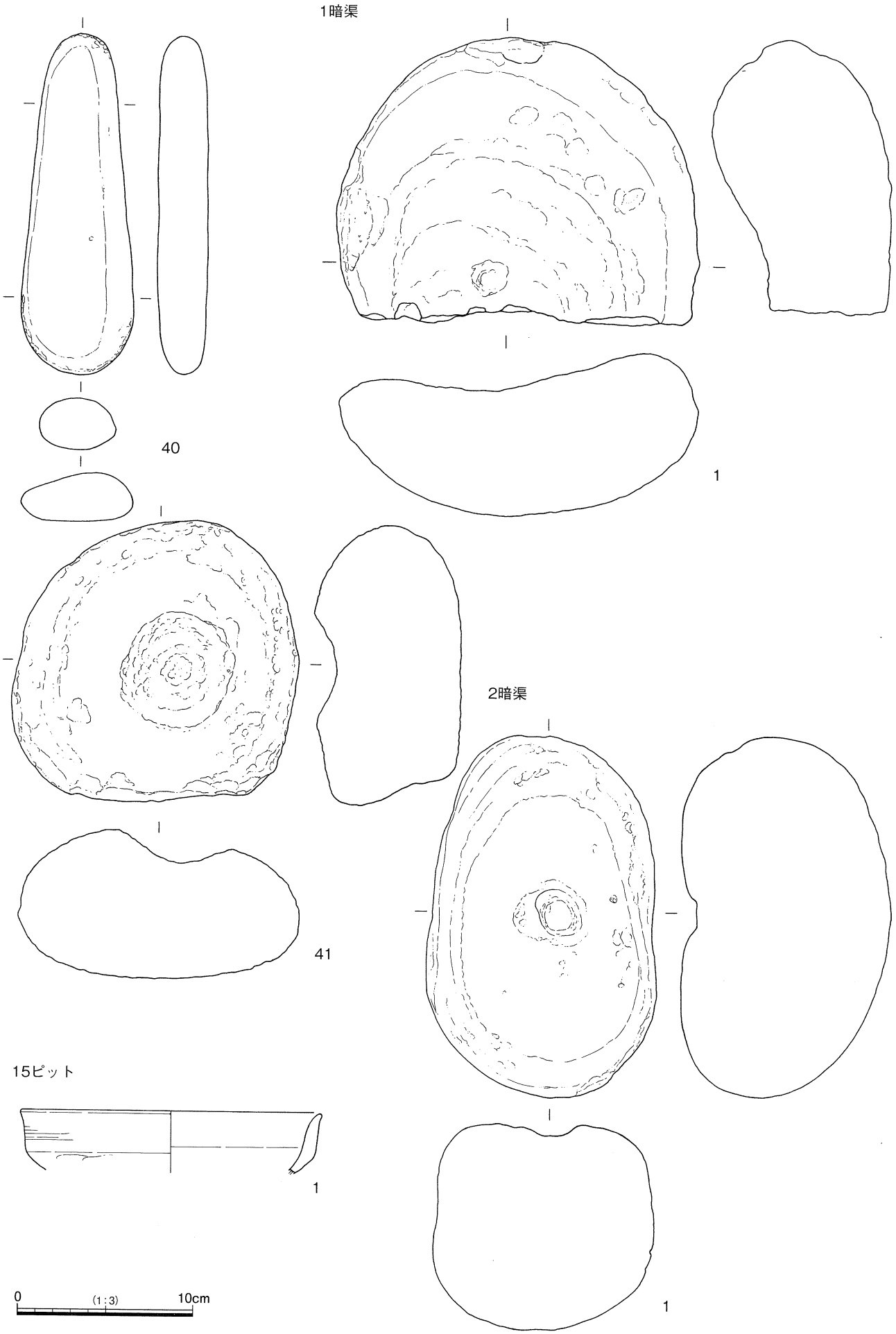
第９図　３号河道(1)遺物



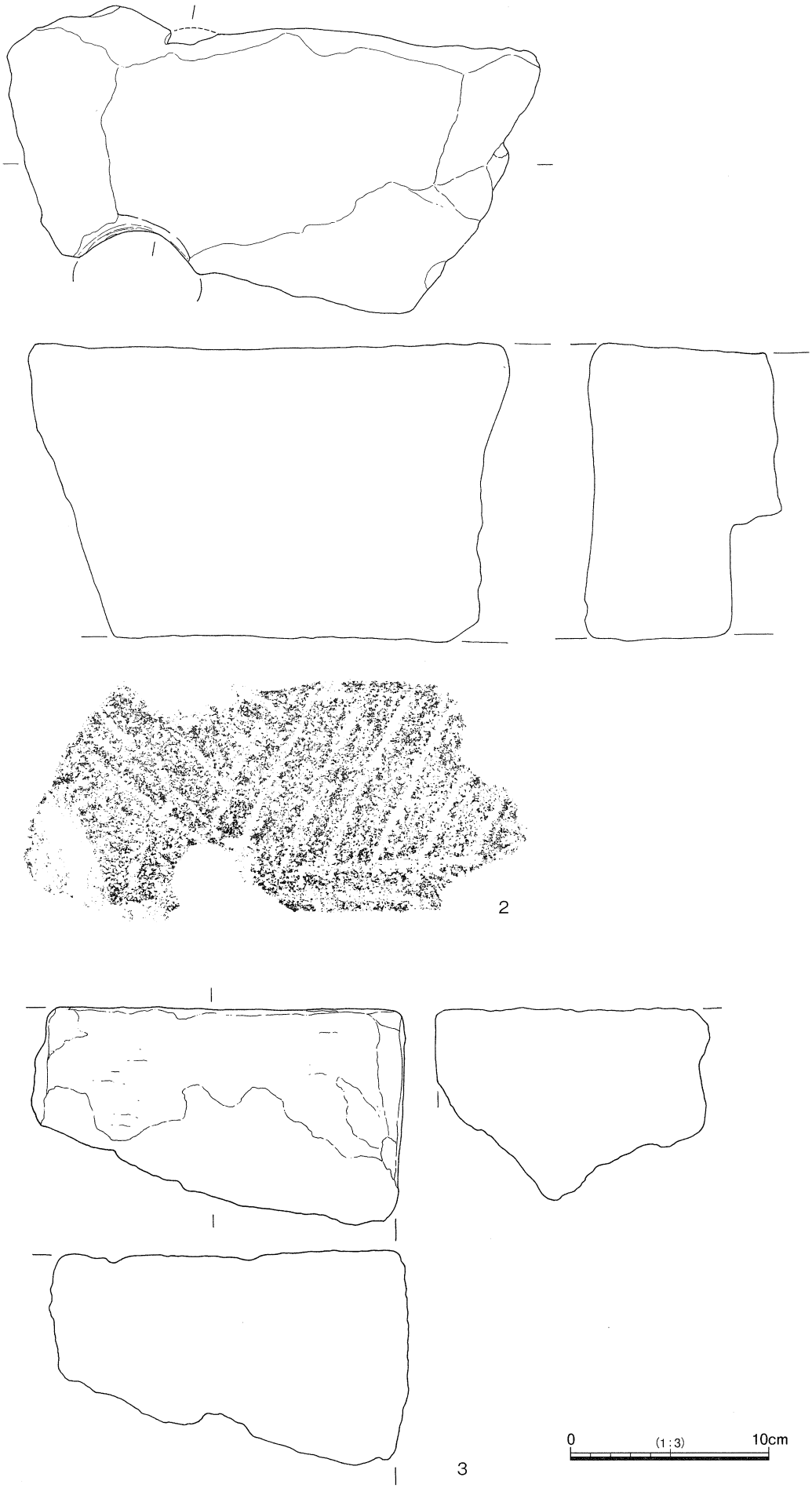
第10図　3号河道(2)遺物



第11図　3号河道(3)遺物



第12図　３号河道(4)、１暗渠、２暗渠(1)遺物



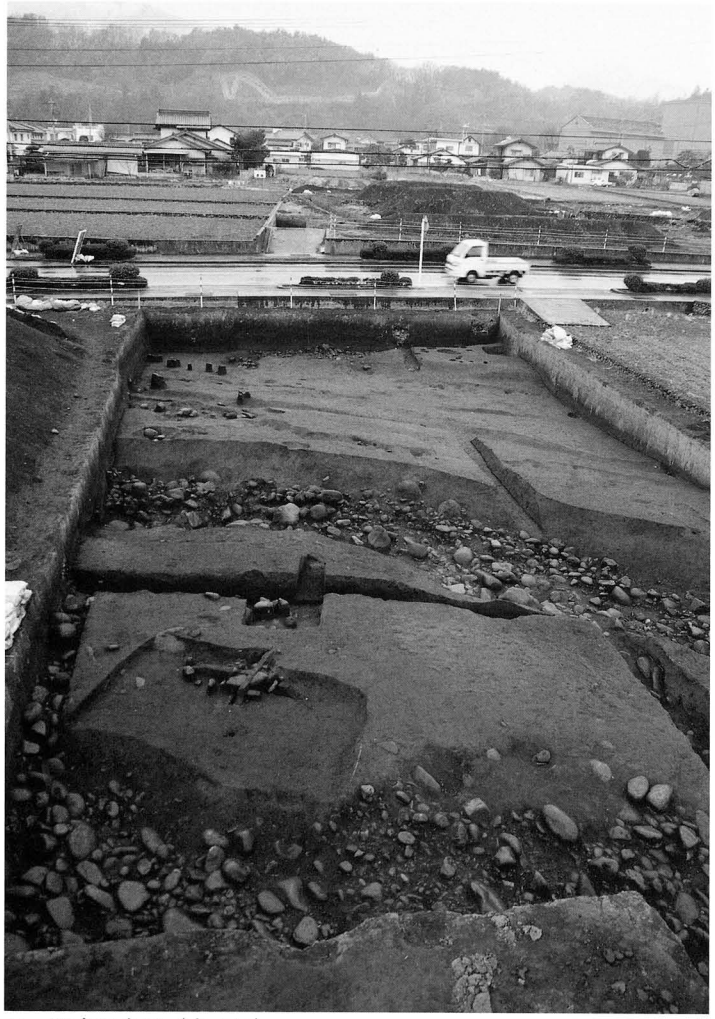
第13図　2暗渠(2)

1　重機による表土剥ぎ

2　２号河道内の精査（南より）

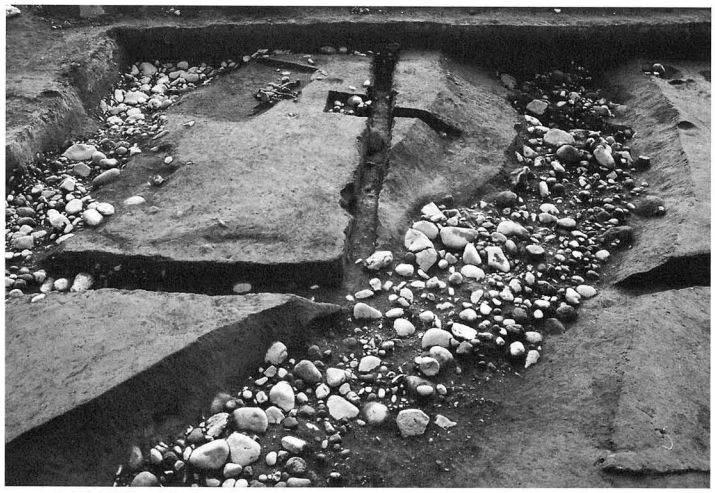
3　作業風景

4　調査区全景（東より）



5　調査区全景（東より）

6　調査区全景・３号河道（南より）



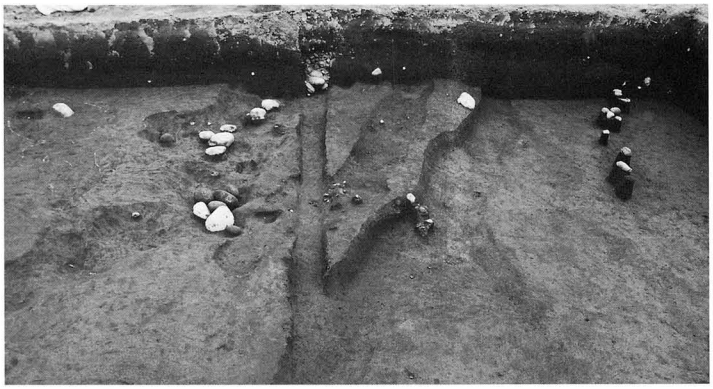
7　３号河道（北より）

図版２

８　３号河道確認状況（南より）

９　２号河道　遺物出土状況（南より）

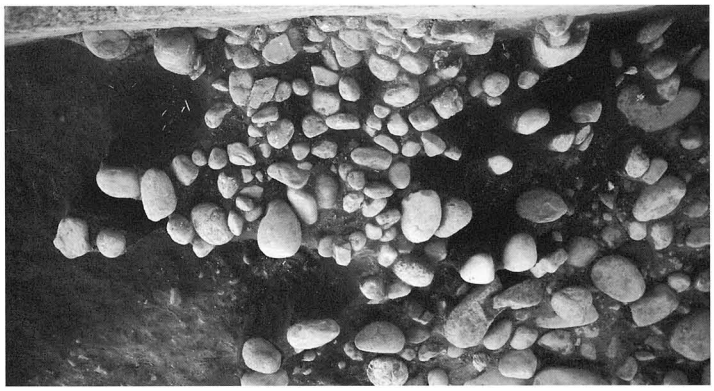
10　２号河道　遺物出土状況



11　２～４号溝完掘状況（北より）

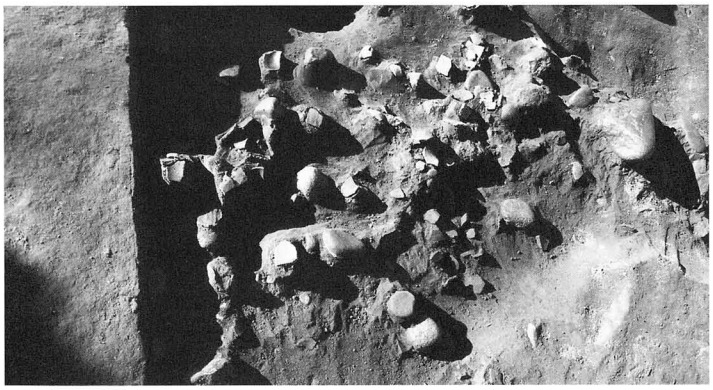
12　ピット群

13　ピット群および１・２号河道（北西より）



14　３号河道内　集石

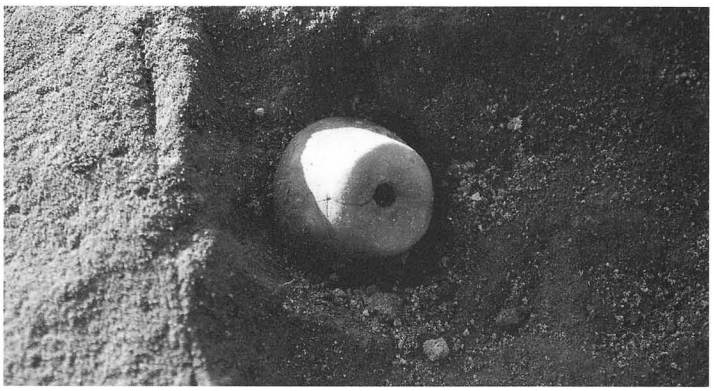
15　３号河道内　集石断面



16　３号河道（左岸）　土器集中区

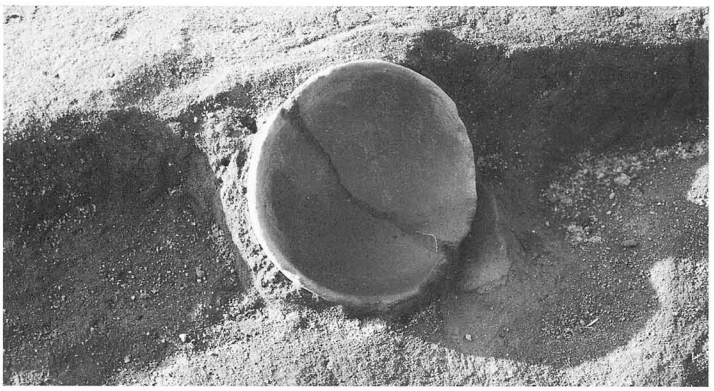
17　３号河道（右岸）　土器集中区

18　1 号竪穴　遺物出土状況（東より）

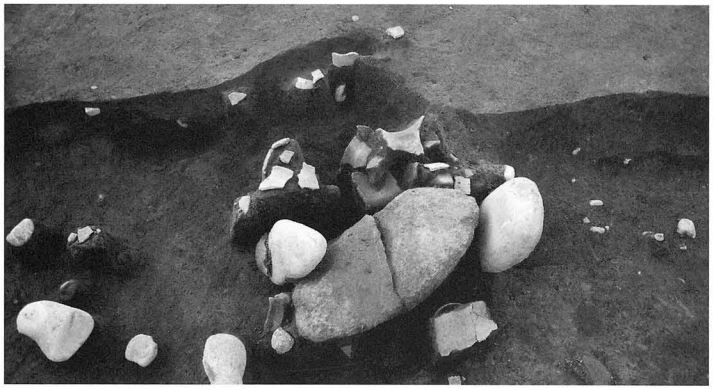


19　1 号竪穴　紡錘車出土状況

20　1 号竪穴　完掘状況（東より）



21　1 号竪穴　土師器坏出土状況

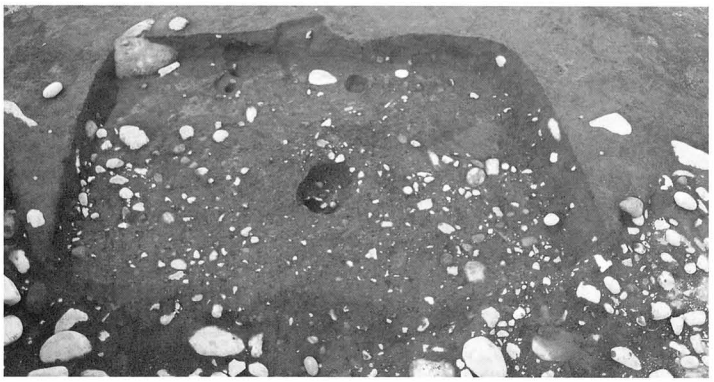


22　1 号竪穴　竈内礫・遺物出土状況（東より）

23　1 号竪穴　竈内袖石（南より）

24　1 号竪穴　完掘状況（東より）

25　1 号竪穴　竈完掘状況（上より）



26　1 号竪穴　掘り方状況（東より）

27　1 号竪穴　竈完掘状況（東寄り）

図版 4

1 号竪穴遺物

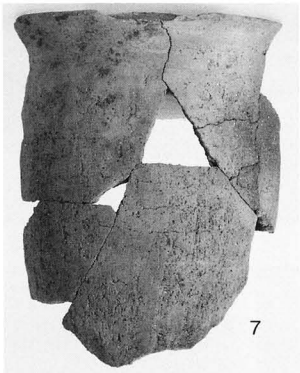
1

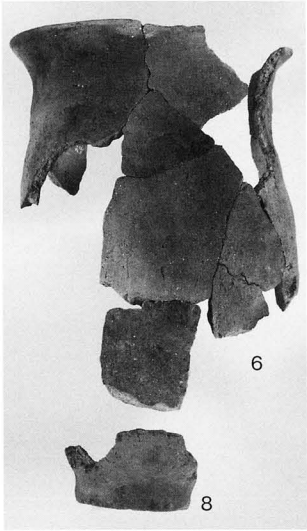
2

3

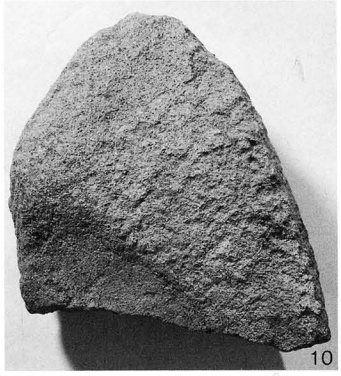
4

5

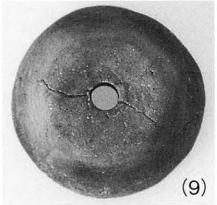

7

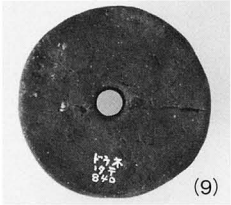

6

8


10

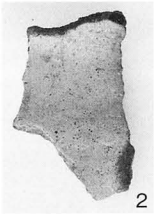
9

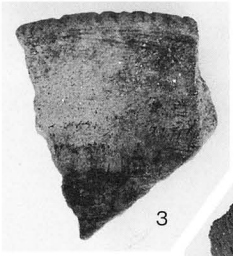

(9)


(9)

2 号溝遺物▶

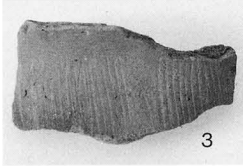
1


2

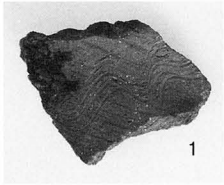

3

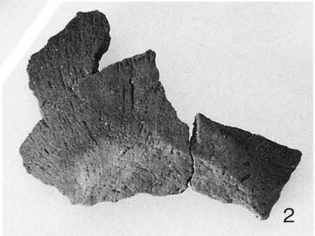
3 号溝遺物

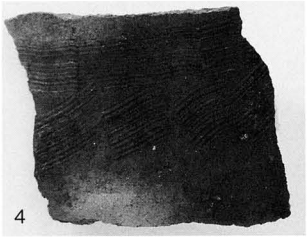
1


3

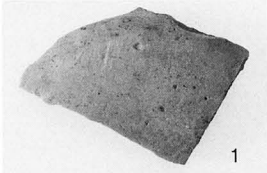
1 号溝遺物


1

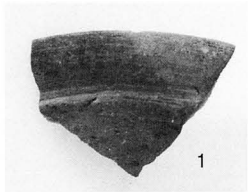

2

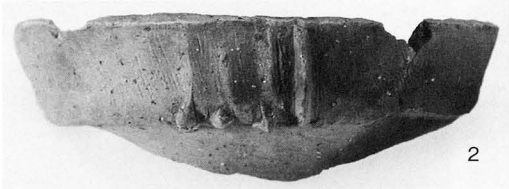

4

4 号溝遺物▶

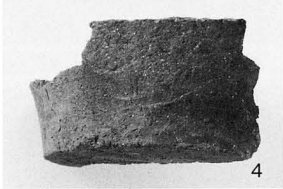

1

1 号河道遺物

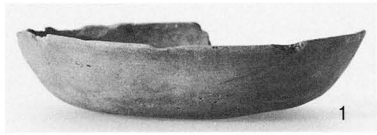

1


2

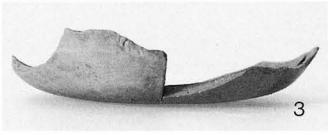
3


4

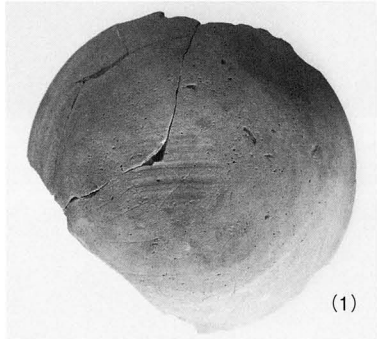
2 号河道遺物

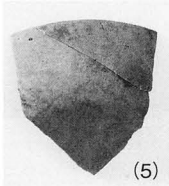

1

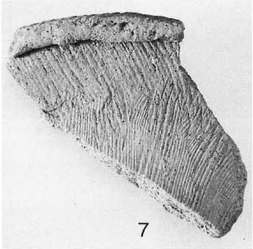
2

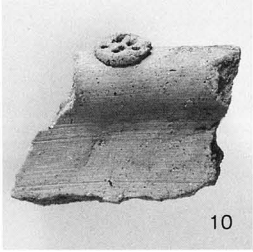

3

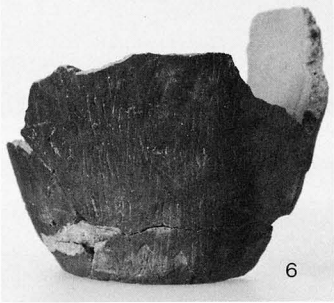
4

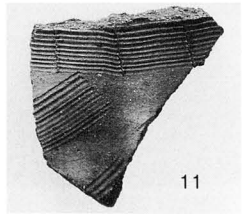

(1)

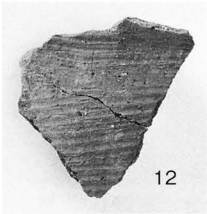

(5)


7

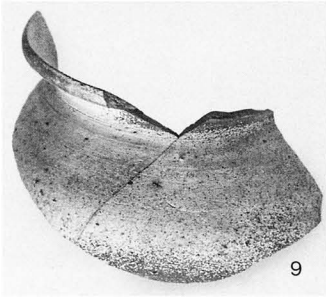

10


6

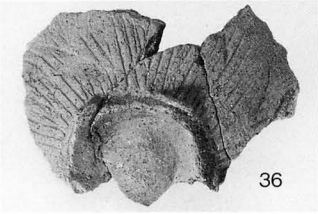

11


12

8


9

3 号河道遺物


36

3 号河道遺物

2

3

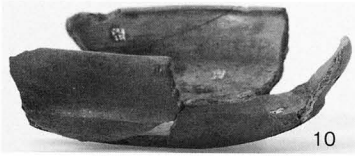
4

5

6

8

9

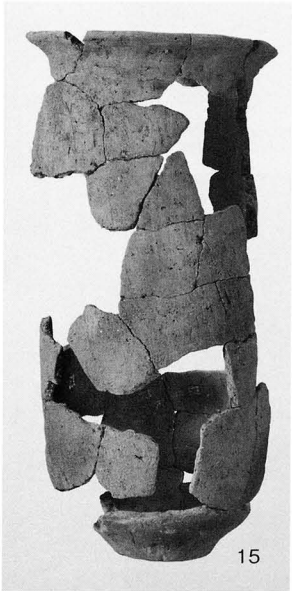

10

11

13

14

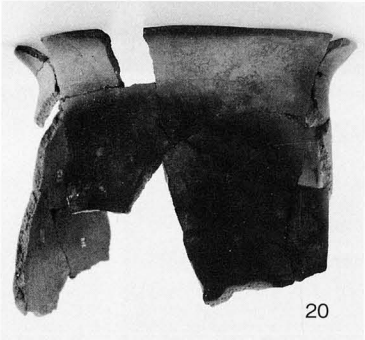
7


15

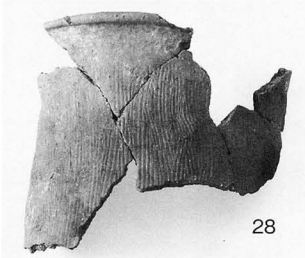
19

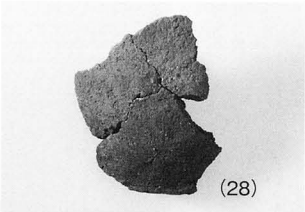
23

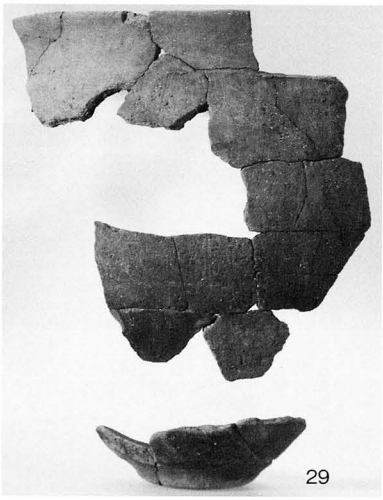
24

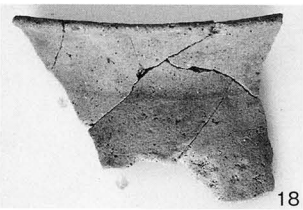

20

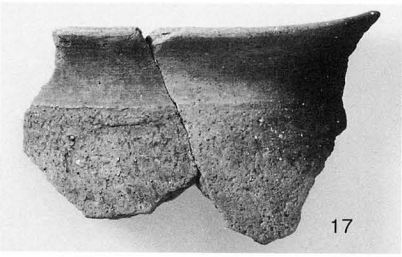
27


28

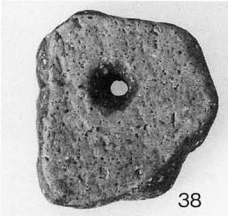

(28)

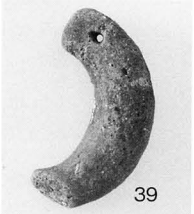

29

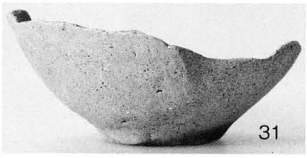

18


17

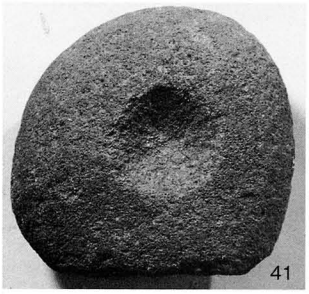
21


38


39


31

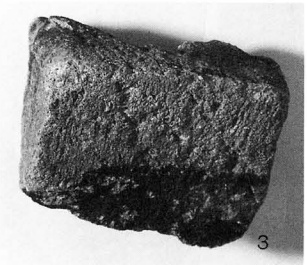
2 号暗渠遺物


41

40

1

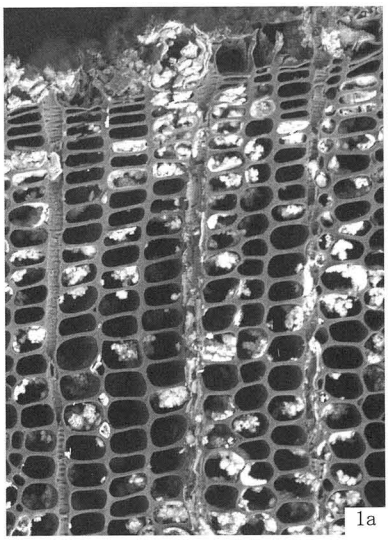
1 号暗渠遺物

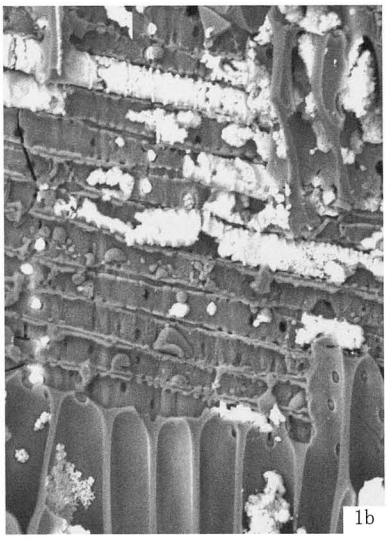

3

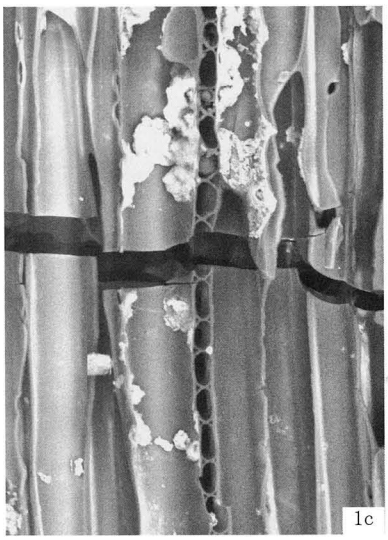
1

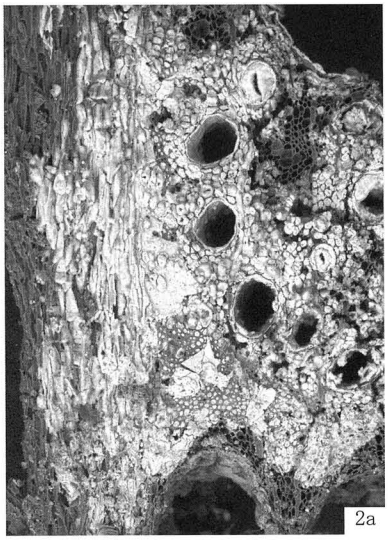
図版 6

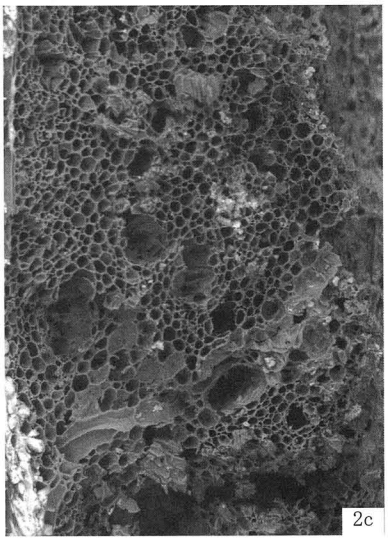
炭化材(1)

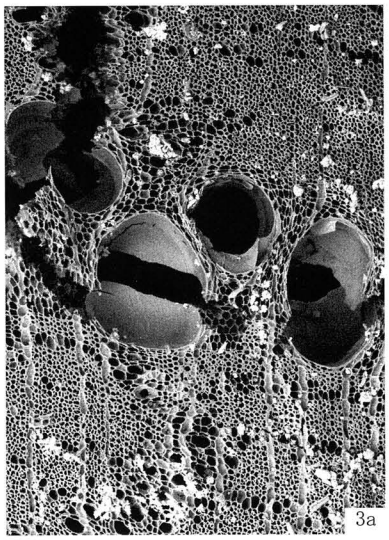


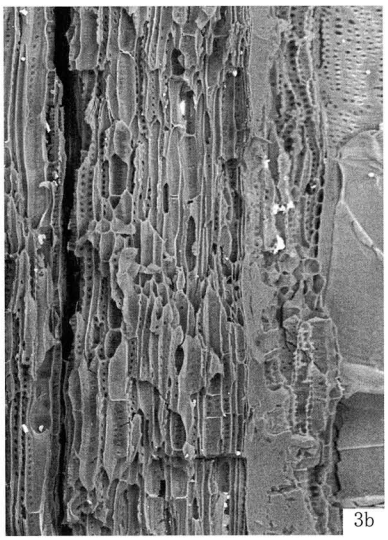


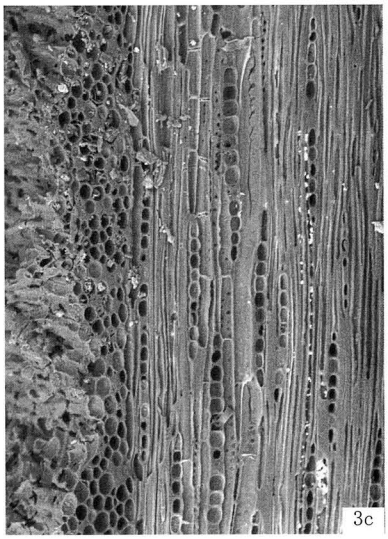








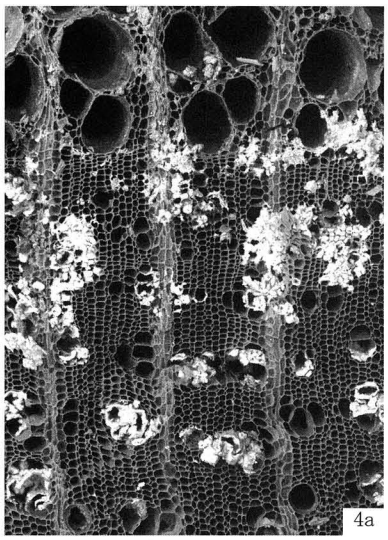


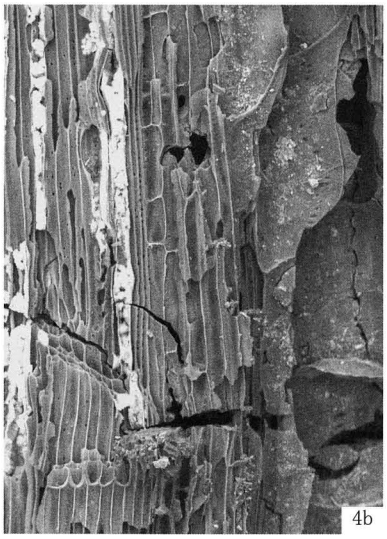


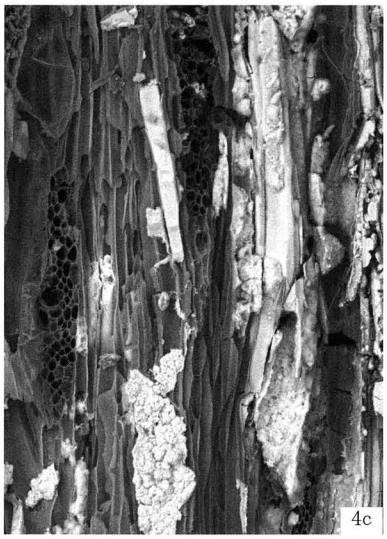
1. モミ属(1タテ内;床面上)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1タテ;カマド)
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(1タテ;カマド)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μm:2-3a
200 μm:1a, 2-3b, c
100 μm:1b, c

炭化材(2)・種実遺体


4a

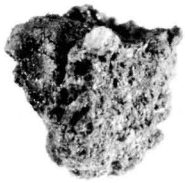

4b


4c

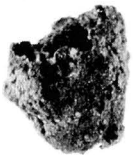
5a

5b

6a


6b

7a


7b

4. タラノキ(1タテ;カマド)
 a:木口, b:柾目, c:板目
5. イネ 胚乳(1タテ;カマド内土)
6. イネ 胚乳(1タテ;カマド内土)
7. イネ 胚乳(1タテ;カマド内土)

200 μm:4a
200 μm:4b, c
2mm:5-7

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うしろだどうのまえいせき
書 名	後田堂ノ前遺跡
副 書 名	日本ネットワークサービス韮崎営業所建設に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	櫛原功一・松元美由紀・高橋敦
編 集 機 関	財団法人 山梨文化財研究所
所 在 地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055－263－6441
発 行 年 月 日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
うしろだどうのまえ 後田堂ノ前	やまなしけんにらさきしふじいまちきたげじょう 山梨県韮崎市藤井町北下条280-1番地ほか	19207	F-37	35° 43′ 39.2286″	138° 26′ 45.9055″	2007年11月12日～12月31日	363	店舗建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後田堂ノ前	集落跡	古墳後、奈良・平 安、中世	竪穴住居・流路跡	土師器・須恵器・石器	土製勾玉

要 約	西竈をもつ小形の古墳時代後期の竪穴住居１軒、および流路跡（河道）を検出した。

後田堂ノ前遺跡

—日本ネットワークサービス韮崎営業所建設に伴う発掘調査報告書—

平成21年(2009) ３月31日　発行

編　集　㈶山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566　TEL 055－263－6441

発　行　韮崎市教育委員会・㈶山梨文化財研究所

印　刷　㈱帝京サービス